

プロセスワークディプロマ
プログラム（コホート制）
コースハンドブック
2011年度-4月期版

日本プロセスワークセンター

Japan Process Work Center

E-mail: info@jpwc.jp

Website: <http://www.jpwc.jp>

Tel & Fax: 03-3485-4208

〒156-0041 東京都世田谷区大原 1-3-11



日本プロセスワークセンターコホート制ディプロマプログラム
コースハンドブック
目次

はじめに	1
I. プロセスワークについて	4
1. プロセスワーク/プロセス指向心理学とは	4
国際的コミュニティ	4
*参考：世界のトレーニングプログラム	5
II. 日本プロセスワークセンターについて	7
1. 沿革	7
2. 日本プロセスワークセンターの組織	7
3. プログラムの運営方針	9
図1：日本プロセスワークセンター組織図	10
III. 日本プロセスワークセンタープロセスワーク公式トレーニングプログラム	11
3つのトレーニングプログラム	11
● 基礎プログラム（初級）	11
● 臨床基礎プログラム（中級）	12
● ディプロマプログラム（上級）	12
図2：日本プロセスワークセンタートレーニングプログラムの流れ	13
IV. プロセスワークディプロマプログラム	14
1. プロセスワークディプロマプログラムの特徴	14
2. プロセスワークディプロマ資格	15
3. ディプロマプログラムが対象とする方	15
4. コホート制	15
5. トレーニングの実施場所と主な連絡手段	16
5-1. トレーニングの実施場所	16
5-2. 主な連絡手段	17
6. 入学手続き	17
6-1 入学の時期	17
6-2 申込手続き	17
6-2-1. 認定プロセスワーカーとの入学前個人セッションとレポート送付	17
6-2-2. 入学考査料の振込み	18
6-2-3. 送付書類	19
6-3. 入学面接と入学手続きの完了	20

6-4.入学の確定と「学生の記録」	21
6-5 日本プロセスワークセンター以外のプログラムから 当プログラムへの移籍および入学	22
7. コミュニティイベントとオリエンテーション	23
7-1. 新入生歓迎ミーティング	23
7-2. 学生ミーティング	23
7-3. ディプロマプログラムオリエンテーション	24
8. カリキュラムと修了に必要な単位	24
8-1. ディプロマプログラム：「個人のワーク」とコア・カリキュラム	24
8-2. 修了要件の一覧	25
表1：ディプロマプログラムの修了要件一覧	26
■入学前の学習	26
■JPWCファカルティ以外の認定プロセスワーカーとのワーク	27
■言語の必要条件	27
■心理学の大学院レベルの学習	28
8-3. スタディコミティ	28
8-4. ピアグループ（トライアド）	29
8-5. 個人セラピー（トレーニングセラピー）	30
8-6. ディプロマ必修クローストセミナーとオンラインクラス	30
●セミナー	30
●オンラインクラス	31
8-7. スーパービジョン	31
A) 個人ライブ・スーパービジョン	31
B) 個人ケース・スーパービジョン（ケース・コンサルテーション）	32
C) グループ・ケース・スーパービジョン（事例検討グループ）	32
8-8. フェイズ1試験（中間での振り返り）	32
■受験許可	34
■試験官および受験手続き	34
■評価方法	34
8-9. インターンシップ	35
A) 臨床インターンシップ	35
B) ワールドワークインターンシップ	36
8-10. 自主学習	36
8-11. 最終プロジェクト	37
8-12. フェイズ2試験（最終試験）	37
8-13. ディプロマの授与	38
9.学籍について	38
9-1 在学年限	38
9-2 休学	39
9-3 復学	39

9-4 退学と再入学	39
10. スカラーシップ	40
11. 学生登録料	40
12. ご連絡・お問い合わせ先	40
13. 各種お振込先	41
巻末資料Ⅰ：日本プロセスワークセンターコホート制ディプロマプログラム履修費用	42
巻末資料Ⅱ：日本プロセスワークセンタースタッフ一覧	43
巻末資料Ⅲ：日本プロセスワークセンターディプロマプログラム フェイズ1 試験（中間の振り返り）のガイドライン	44

はじめに

日本プロセスワークセンター（Japan Process Work Center: 以下 JPWC）の「プロセスワークディプロマプログラム」にご関心をお寄せいただき、ありがとうございます。

JPWC は、プロセスワークの普及とそれを通じた社会貢献を目的とする任意団体です。国際プロセス指向心理学協会（International Process Oriented Psychology Association: IAPOP）の一員として、国際基準にかなった公式トレーニングプログラムの提供を中心に活動しています。2010年4月現在、下記の3つのトレーニングプログラムを提供しています。

- 1) プロセスワーク基礎プログラム（旧「資格プログラム」。以下「基礎プログラム」）
- 2) プロセスワーク臨床基礎プログラム（以下「臨床基礎プログラム」）
- 3) プロセスワークディプロマプログラム（以下「ディプロマプログラム」）

3つのプログラムは、「基礎プログラム」が初級、「臨床基礎プログラム」が中級、「ディプロマプログラム」が上級と位置づけられ、プロセスワークの基礎から応用まで一貫して学ぶことができます。同時に、さまざまな興味関心やニーズ、学習スタイルに応じて学べるよう、それぞれのプログラムに特色があります。プログラム全体の構成や各プログラムの詳細については、「Ⅲ. 日本プロセスワークセンタープロセスワーク公式トレーニングプログラム」をご覧ください。

このハンドブックでご案内する「ディプロマプログラム」は、プロセスワークの専門家をめざす方のために、全応用領域にわたって詳細かつ専門的なトレーニングを行うプログラムです。プロセスワークのトレーニングとしては国際基準にもとづいて行われる最上級のプログラムであり、修了者には「プロセスワークディプロマ」が授与され、「認定プロセスワーカー」または「ディプロメイト」と呼ばれて、プロセスワークの専門家としての活動を認められます。

「プロセスワークディプロマ」とは、現在プロセスワークで得られる資格の中で最も高度な認定資格です。プロセスワークの基盤となる理論や技法に習熟し、その広範な応用領域それぞれについて一定の知識と臨床能力をかねそなえていることを保証するものです。

その取得には、心理学のみならずさまざまな領域にわたる専門知識と、個人からグループ、組織、社会、文化まで実践的にかかわっていく高度なファシリテーション力を身につけること、そして同時に、能力に相応する人格的成長をすることが求められます。自らの生き方を見つめなおし、時には大きな変容を潜り抜けることも要請されます。

従来の「ディプロマプログラム」は、個々の学生が自分のペースで学習計画をデザインして進める自律性の高いプログラムでした。しかし、学生が孤立しがちで学習の進め方にも迷いやすく、いたずらに年数だけを重ねてしまう面もありました。そこで日本プロセスワークセンターでは、2011年度より「コホート制」に形式を改めました。「コホート制」とは、同じ時期に入学した学生が一つの学習グループ（コホート）となり、そのまま卒業までともに学ぶ形式です。セミナー日程なども固定しており、スケジュールが事前に立てやすくなっています。ふだんは離れて住む学生同士でも、卒業までともに学ぶ仲間とのつながりを深められるのが特徴です。学年制と

違うのは、入学申込者が一定の人数に達するまで開講されない、つまり毎年開始されるとは限らないという点です。自由度は低くなりますが、より深く有機的につながりあった学びの体験が得られることとなります。

また JPWC では、「臨床基礎プログラム」修了を「ディプロマプログラム」への入学必要条件としています。「臨床基礎プログラム」は、「ディプロマプログラム」の前半3分の1にあたります。プログラムの枠組みの中でプロセスワークを学ぶとはどういうことか、ここでしっかりと体験された上で、「ディプロマプログラム」への入学をお考えください。ただし、「臨床基礎プログラム」を修了されても、入学面接に合格しなければ、「ディプロマプログラム」に入学することはできません。入学が認められると、「臨床基礎プログラム」での取得単位はすべて「ディプロマプログラム」の単位として認められます。

「ディプロマプログラム」への入学は、同時に、世界中に広がるプロセスワークのネットワークにディプロマ候補生として参加することも意味します。多文化状況に開かれた姿勢や、ワールドワークや国際学会、国際的メーリングリストといった場にも参加することが期待されます。そのため、プロセスワーク関連の英語文献を読んだり、日常会話程度の英会話を行うことも必要となります。入学時にそうである必要はありませんが、在学中にそれだけの英語力を身につけようとする意思と実践的計画を持って入学されることをお勧めします。

プロセスワークについて、また人や社会のつながりと変容に関わるさまざまなトピックについて、幅広い興味関心をもって積極的に学び、自らの変容をめざす意欲をお持ちの方のご参加をお待ちしています。

このハンドブックでは、まずプロセスワークや JPWC の沿革、3つのトレーニングプログラムの大枠についてご説明した後に、「ディプロマプログラム」の詳細をご案内しています。

とりあえず「ディプロマプログラム」について知りたいという方は、「Ⅳ. プロセスワークディプロマプログラム」にお進みください。

このハンドブックをお読みになってのご質問やさらなる詳細などについては、どうかお気軽に日本プロセスワークセンター事務局までお問い合わせください。

日本プロセスワークセンター事務局

E-mail: info@jpowc.jp

Website: <http://www.jpowc.jp>

Tel&Fax: 03-3485-4208

(電話受付：毎週金曜10:00-13:00、14:00-17:00のみ)

〒156-0041 東京都世田谷区大原 1-3-11-102

このコースハンドブックは、プログラムを進めていく上で常に参照するガイドブックのようなものです。大切に保存し、時に応じて参照してください。

プロセスワークのトレーニングプログラムは、よりよいプログラムとなるために常に変化を続けています。プログラム在籍中にプログラムのシステムが変わることも珍しくありません。大きな変化の場合、在籍中の学生は、自分が入学した時点でのシステムで続けるか、新しいシステムに移行するかを選ぶことができます。特に後者の場合には、入学した時点でのコースハンドブックを修了時まで使用することが必要となりますので、そのためにも大切に保存してください。

プログラムのシステムやハンドブック更新のお知らせは、学生向けメーリングリスト jpwc-cpdp でお伝えします。また日本プロセスワークセンターのホームページ www.jpwc.jp で最新版のハンドブックがダウンロードできます。

I. プロセスワークについて

1. プロセスワーク/プロセス指向心理学とは

プロセスワークは、プロセス指向心理学とも呼ばれ、個人や集団、社会のレベルまでふくめた変容についての学際的なアプローチです（以下「プロセスワーク」と呼びます）。1970年代に、チューリッヒのユング研究所の心理臨床家であったアーノルド・ミンデル博士が病を「無意識の意味深い表現」として研究をはじめたところから発展してきました。ユング心理学、コミュニケーション理論、タオイズム、物理学、禅宗、シャーマニズムなどから学びつつ、現在では葛藤解決に効果的なグループファシリテーション技法としても注目を集めています。

プロセスワークは、人生において問題あるいは痛みとして体験されるような領域への、新しい取り組み方を提案します。問題の解決は問題そのものの中に含まれていると考えるのです。身体症状や関係性の問題、グループ内の葛藤や社会的な緊張状態なども、子どものような好奇心や深い尊重の念をもって取り組めば、個人および集団の成長にとってきわめて重要な新たな情報をもたらしてくれると考えます。

プロセスワークはセラピーの包括的パラダイムとして、人間の経験の全領域を扱うことを意図しています。個人や家族やグループがその自覚を広げ、創造性を伸ばしていくための実践的な枠組を提示しており、近年はグループファシリテーションや葛藤解決技法としても注目されています。プロセスワークがこれまでに応用されてきた分野は実に幅広く、その中には、深刻な病や死にゆく人とのワーク、葛藤解決、変性意識状態や極限意識状態（いわゆる精神病状態）、アディクション（依存症）、家族療法や人間関係についてのワーク、数人から数百人にわたるグループプロセス、組織変革などがありますが、その範囲はさらに広がりつつあります。心理臨床をはじめ医療、福祉、教育、司法、組織開発やコミュニティ開発などさまざまな現場で実地に役立つ分析方法と実践的スキルを豊富に提供しています。

2. 国際的コミュニティ

1982年にミンデルが最初の著作『ドリームボディ』を出版してから、スイスのチューリッヒの彼のもとにはさまざまな国から学びたいという人たちが集まり、自然にコミュニティを形成しました。ここで最初のトレーニングプログラムが開始されます。90年にミンデルおよび中核的メンバーの何人かがアメリカに戻り、オレゴン州ポートランドにポートランドプロセスワークセンター（現プロセスワーク研究所 Process Work Institute: PWI）を設立してからは、さらに世界各地にセンターやトレーニングプログラムが自然発生的に増えてきました。現在では、スイス、アメリカをはじめ、日本、オーストラリア&ニュージーランド、カナダ、イギリス、アイルランド、ポーランド、スロヴァキア、ギリシャ、メキシコ、デンマーク、イスラエルなど多くの国々で、学生と教師の国際的なコミュニティが活発に活動しています。2年に1度、数百人の参加者を数十カ国から集めて行われるワールドワークセミナーが20年近く続いているのはその一例です。

2005年には、世界各地の認定プロセスワーカーが専門家として協力しあい、教育や調査研究を進めるために、国際プロセス指向心理学協会(International Association of Process Oriented Psychology: IAPOP)が設立されました。2006年にはロンドンで第1回 IAPOP 国際学会が開かれ、第2回はポートランドで2010年2月に開催されました。

JPWCは、IAPOPの基準に基づいたプロセスワークトレーニングプログラムを提供する機関として、国際的ネットワークの一翼をになっています。JPWCのプログラムでは、ワールドワークなどの海外でのプロセスワークセミナーへの参加もお勧めしています。海外のセミナーや認定プロセスワーカーとのセッションも、プログラムの単位として認められます。

<参考：世界のトレーニングプログラム>

プロセスワークのトレーニングプログラムは、世界各地のセンターの自主的な運営に大きくまかされていますが、最上級プログラムである「ディプロマプログラム」だけは、一定の国際基準があり、開設にはIAPOPの認可が必要です。

JPWCはこれまで、ポートランドのプロセスワーク研究所(PWI)のプログラムを範としてきましたが、PWIのプログラムも近年大きな変化を遂げました。

2010年4月現在、PWIでは下記の4つのプログラムが運営されています。

- 1) プロセスワークディプロマ/修士課程 Diploma/Master in Process Work Program: 認定プロセスワーカー(ディプロメイト)養成プログラム。プロセスワークの全応用領域についての一定の知識と臨床能力を育成。4年間のコホート制(章末の注参照)。

ディプロマプログラムとプロセスワーク修士課程は、以前は別々のプログラムとして運営され、後者ではポートランドに住むことが必須でしたが、2007年にディプロマ/修士プログラムとして統合されました。それまでのディプロマプログラムが学生個人の流れや成長に合わせて修了までの期間が異なり、人によっては10年を超えることもあったのに比べ、より短期(4年間)で修了できるコホート制のプログラムとなっています。ただし、ディプロマプログラムなどで教える資格を得るためには、ディプロマプログラム修了後さらに2年間のトレーニングが必要になりました。

- 2) 組織変革と葛藤ファシリテーション修士課程 Master of Conflict Facilitation and Organizational Change: ワールドワークをはじめとする葛藤解決やグループファシリテーションへのプロセスワークの応用に焦点を絞ったプログラム。3年間のコホート制。
- 3) 資格プログラム Certificate of Study in Process Work / Certificate Program: プロセスワークの枠組の中で個人の関心を追及するプログラム。2年程度。
- 4) 独立学習プログラム Independent Study Program

2009年に開設された短い入門編プログラム。プロセスワークの幅広い応用領域のうち一つに焦点を当て、個人の関心やペースに合わせて進める。

いずれのプログラムも、ふだんは遠方に住んでいても学べる形になっています。ただし、1)は年に3回、2)は年に2回、ポートランドで1回10日間の集中クラスを履修する必要があります。

世界各地のトレーニングプログラムについて知りたい方は、当センターサイトの「リンク集」のページから各センターのサイトに行くことができます。また、中心的なサイトを下記にあげておきます。

- PWI ホームページ：www.processwork.org
- ワールドワーク：www.worldwork.org（2008年ワールドワークロンドン以降）
- IAPOP ホームページ：www.iapop.com

Ⅱ. 日本プロセスワークセンターについて

1. 沿革

日本プロセスワークセンター（Japan Process Work Center: 以下 JPWC）は、国際プロセス指向心理学協会（International Association of Process Oriented Psychology: IAPOP）の一員としてプロセスワーク公式トレーニングプログラムを提供する任意団体です。

日本プロセスワークセンターは、次のような目的を持って活動しています。

1. プロセスワークの普及および学習機会の提供
 - 広く一般の方向けのプロセスワークセミナーやイベントの開催
 - プロセスワークを深く学びたい方のための公式トレーニングプログラムの開催
2. プロセスワークに関心を持つ方々の交流の促進、コミュニティづくり
3. プロセスワークがもつ方法論や考え方を通して、個人やグループ、組織や社会が直面する問題についての理解や自覚を高めることを促進し、社会に貢献すること

JPWC の始まりは、2001 年 4 月の「プロセス指向心理学資格プログラム」開始に遡ります。続いてプロセスワークの最上級トレーニングプログラムである「ディプロマプログラム」開講の準備が進められ、2004 年にはプログラムの運営組織として「プロセスワーク・ジャパン」を設立、2005 年 7 月にこれを「日本プロセスワークセンター」と改称して、現在に至ります。そして 2005 年 9 月に「ディプロマプログラム」が開講され、日本でも本格的なトレーニングが行えるようになりました。

さらに 2008 年 4 月より、それまでのプログラムを 3 つのプログラム（「基礎プログラム」「臨床基礎プログラム」「ディプロマプログラム」）に再編し、またレベル別トレーニングセミナーを年間を通して定期開催することで、初級から上級までプロセスワークを一貫して学べる体制を整えました。2010 年 3 月には、「臨床基礎プログラム」の初めての修了生が誕生しました。そして、「臨床基礎プログラム」修了を入学要件をとしたために学生募集を一時停止していた「ディプロマプログラム」を、2011 年 4 月に再開する運びとなりました。

2. 日本プロセスワークセンターの組織

JPWC は、下記のような組織構成で運営されています。10 ページに全体の組織図を掲げています。各役職の担当者氏名は、巻末資料Ⅱ「日本プロセスワークセンタースタッフ一覧」をご覧ください。

ファカルティ（教員）

ファカルティとは、プログラムの教育面および管理運営面に責任を持つ教員です。プロセスワークのトレーニングプログラムのファカルティになるためには、認定プロセスワーカーであ

ることが必要です。

JPWC のファカルティは、日本出身の認定プロセスワーカーで構成されており、日本におけるプロセスワーク公式プログラムのあらゆる面での管理運営を行います。その業務内容には、入学申込の受理及び検討、プログラムの教育内容および指針の設定・検討・改訂、セミナー等の学習機会の提供、セラピスト／スーパーバイザー／教師と学生との間に学習上有益な関係性を作り出すお手伝い、学生が自身で作成した学習計画を達成した際の証明、ならびに資格名称授与などがあります。

ファカルティはまた、センターのプログラムの学生コミュニティをこえて、プロセスワークに興味のある方々全体（プロセスワーク・コミュニティ）にとっても有益なように、トレーニングを調整していくこともめざします。さらに日本における認定プロセスワーカーのための、教育資格、継続教育、必須のスーパービジョンのガイドライン作りも行います。加えて、学生に教師に対する苦情がある場合に、それを訴えることのできる倫理委員会を設置します。

ファカルティの詳細なプロフィールは、当センターのウェブサイト www.jpwc.jp の画面左にある「日本プロセスワークセンターについて」をクリックし、下に出てくる「認定プロセスワーカー一覧」ページでご覧いただけます。

ファカルティ会議

JPWC の最高意思決定機関は、全ファカルティが参加するファカルティ会議です。

ファカルティ会議は、具体的な事業方針の策定を行うコア・ファカルティ数名を指名し、その提案や報告にもとづいて、全般的な方針の決定を行います。コア・ファカルティは、ファカルティ会議の承認を得て事業を実施し、ファカルティ会議に報告します。

コア・ファカルティ（中核教員）

コア・ファカルティは、センターの実際の運営の中心となって方針策定や実施を行うファカルティメンバー数名のことを示します。

うち 1 名は事務局長、1 名はトレーニング・ディレクターです。事務局長は日本プロセスワークセンター事務局を設置・統括し、運営全般の方針策定および実施、そして学務運営に責任を負います。トレーニング・ディレクターは、トレーニングプログラムの教育内容策定、実施に責任を負います。この 2 名は互いの業務の補助も行います。

事務局

JPWC の運営の実務全般を行います。運営方針などはファカルティ会議の委任を受けて事務局長が決定しますが、学務等の詳細業務を行う実務担当者をおく場合があります。

学生担当

ファカルティのうち、学生がトレーニングプログラムを円滑に進めていけるよう学生からのあらゆる相談にのるのが学生担当です。とくに、学生とセラピスト／スーパーバイザー／教師の関係性のトラブルや、事務局やセンター全般の運営に対しての要望など、学生が一人では解決しにくい問題について、学生の立場を重視しつつファシリテートしていきます。

特別アドバイザー

ファカルティは認定プロセスワーカーで構成されますが、ファカルティ会議は、認定プロセスワーカー以外の特別アドバイザーをおくことができます。アドバイザーは組織運営についてのアドバイスをするものとします。(2009年までは「ファカルティ会議特別アドバイザー」という名称でしたが、アドバイザーがファカルティ会議に出席しない場合もあるため、「特別アドバイザー」の名称に変更しました。)

理事会

ファカルティ会議はまた、諮問機関として理事会を設置し、とくにセンターのプロセスワークコミュニティ全般への貢献についてその意見を傾聴します。理事には、日本において長年にわたってプロセスワークを愛し、普及に貢献して下さった方々をお願いしています。

倫理委員会

ファカルティ会議はまた、倫理委員会を設置します。倫理委員会は、ファカルティから出される内部委員1名、プロセスワーク以外の領域の有識者から選ばれる外部委員2名で構成され、互選で選定されます。

倫理委員会は、プロセスワークを行う上での倫理基準の策定を行います。また、プログラムの学生と教師(スーパーバイザーとスーパーバイジーを含む)の関係性において何らかのトラブルがあり、学生担当のレベルで解決に至らなかった場合に、調査・勧告を行い、問題の解決を図ります。

3. プログラムの運営方針

一般的方針

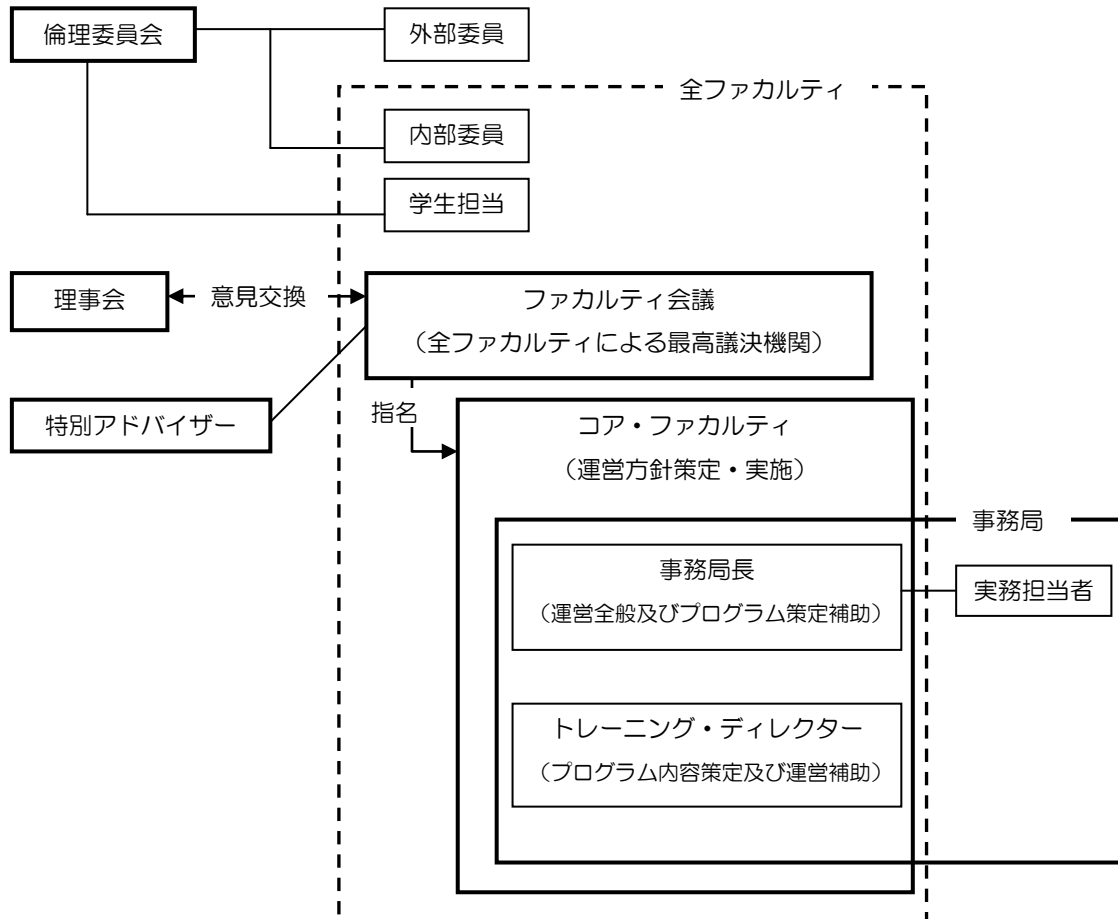
JPWC がディプロマプログラムの一環として提供するクラスやワークショップ、セミナーは、教育として経験して頂くものです。身体的または心理的治療を意図したものではないことにご注意ください。

非差別の方針

JPWC は、深層民主主義的な環境を作り出そうと常に努力しています。それは、性別・人種・肌の色・宗教・身体的ハンディキャップ・国籍または民族的出自・社会的地位・年齢・性的指向などに関わらず、一人一人が参加することができ、自分を表現することができ、また耳を傾けられていると感じられるような環境です。

図 1：日本プロセスワークセンター組織図

(2011年3月現在。近日改定予定)



Ⅲ. 日本プロセスワークセンター

プロセスワーク公式トレーニングプログラム

3つのトレーニングプログラム

プロセスワークは、動きや身体感覚など、ふだんなかなか目を向けない知覚や創造性を重視します。生まれてこのかた見てこなかったものが見えるようになるには、ある程度の時間がかかるものです。また一対一の個人臨床から社会・組織のワークまで扱う範囲が幅広く、応用領域が多岐にわたるため、すべての分野を学ぶには長い時間とエネルギーがかかります。その一方、プロセスワークのユニークな発想に少しふれるだけでも、日ごろの考え方や人との付き合い方が変わったり、トラブル解決の糸口がつかめたりします。日々の暮らしがより気持ちよく豊かに変わるヒント、楽しく遊んだり創造力を刺激するワクワク感は、いつでもどこでも使えるものです。

日本プロセスワークセンターでは、そのようなプロセスワークのさまざまなニーズや使い方にあわせて、また基礎から上級の応用まで一貫して学べるよう、「基礎プログラム」、「臨床基礎プログラム」、「ディプロマプログラム」の3段階にわけてトレーニングプログラムを提供しています。各プログラムで取得した単位はすべて、より上級のプログラムの単位あるいは必修時間数として認められます。

それぞれに特色がありますが、いずれも、セミナーへの参加、個人セッション、スーパービジョン、自主学習（ピア・グループを含む）などにより、学生が主体的に学びを進めていきます。遠隔地にいても履修できるよう、個人セッションやスーパービジョンには電話やスカイプを使うことができます。またメールや会議電話などを使ったイベントやセミナーも開催されます。ただし、セミナーの多くは主に東京で開催されるため、関東以外にお住まいの方には旅費が発生してしまうことをご了承ください。

プログラムの詳細については、各プログラムのコースハンドブックをご覧ください。JPWCウェブサイト www.jpwc.jp から無料でダウンロードして頂けます。印刷されたコースハンドブックの郵送をご希望の場合は、日本プロセスワークセンター事務局 info@jpwc.jp までお問合せください。

● 基礎プログラム（初級）

プロセスワークの基礎を学んでご自分の仕事や生き方に生かしたいという方に最適なコースです。プロセスワークをどんな目的で使うにしても、必ず役に立ついちばんの基礎を必修セミナーで学び、あとはご自分の希望やニーズに合わせて学習計画を立て、ご自分のペースで主体的に進めていく、当センターのプログラムの中でもっとも自由度の高いプログラムです。

心理臨床や医療などの対人援助職の方から、さまざまな心身ケア技法にかかわる方、自分自身を深く知りより豊かな生き方を探りたい方、ダンスやデザインなどアートや創造性をゆたかに楽しみたい方、グループファシリテーションに特化して学びたい方まで、幅広い興味関心をもって学んでいただけます。

単位制で、セミナーや個人セッションなどの既定の単位数を取得すれば修了できます。

修了時には「プロセスワーク初級プラクティショナー」（プロセスワークの知識を生活や専門領域に活かしながら、豊かなライフスタイルを提案・実現できるようトレーニングしたことを JPWC が証明する資格）が授与されます。

（従来の「資格プログラム」を修了した方は、さらに一定のセミナーに参加することで上記資格を得られます。詳しくは日本プロセスワークセンター事務局にお問合せください。）

● 臨床基礎プログラム（中級）

プロセスワークを専門職の仕事の現場で使える実践力をつけたいという方に最適なコースです。もともと心理療法に発し、心理臨床や精神医療にかかわる分野を得意とするプロセスワークですが、福祉、教育、司法など人にかかわる分野、あるいは人材開発、組織開発、国際協力や紛争解決などグループや葛藤を扱う現場にも大いに役立ちます。当プログラムは、専門職の高いニーズにも対応できるだけの深い知識とスキルをしっかりと学び、スーパービジョンで自分自身の実践力を磨いていくことを目的としています。そのため、基礎プログラムより必修セミナーやセッション数が大幅に増えています。「ディプロマプログラム」の前期課程（フェイズ1）で学ぶべき理論や知識の 8 割程度をカバーし、臨床実践に必要な基礎知識の習得と実技のトレーニングが行えるよう構成されています。

基礎プログラムと同じく単位制で、修了時には「プロセスワーク初級セラピスト」（プロセスワークを心理臨床、医療、福祉、教育、司法、経営などの専門分野、臨床現場で活かすための基礎的なトレーニングを行ったことを JPWC が証明する資格）が授与されます。

● ディプロマプログラム（上級）

プロセスワークの専門家をめざす方のために、全応用領域にわたって詳細かつ専門的なトレーニングを行うプログラムです。プロセスワークのトレーニングとしては最上級のプログラムで、プロセスワークの広範な応用領域それぞれについて一定の知識と臨床能力を身につけ、それに相応する人格的成長をすることが求められます。自らの生き方を見つめなおし、時には大きな変容を潜り抜けることも要請されます。

単位制ではなく、上記の知識、能力、自己成長が認められなければ修了できない点で「基礎プログラム」「臨床基礎プログラム」とは大きく異なります。

また、2011 年度以降はコホート制（一定数の入学者がそろったところで開講し、修了までそのグループで一緒に学んでいく形式）を取ることも、他の 2 つのプログラムと大きく異なる点です。

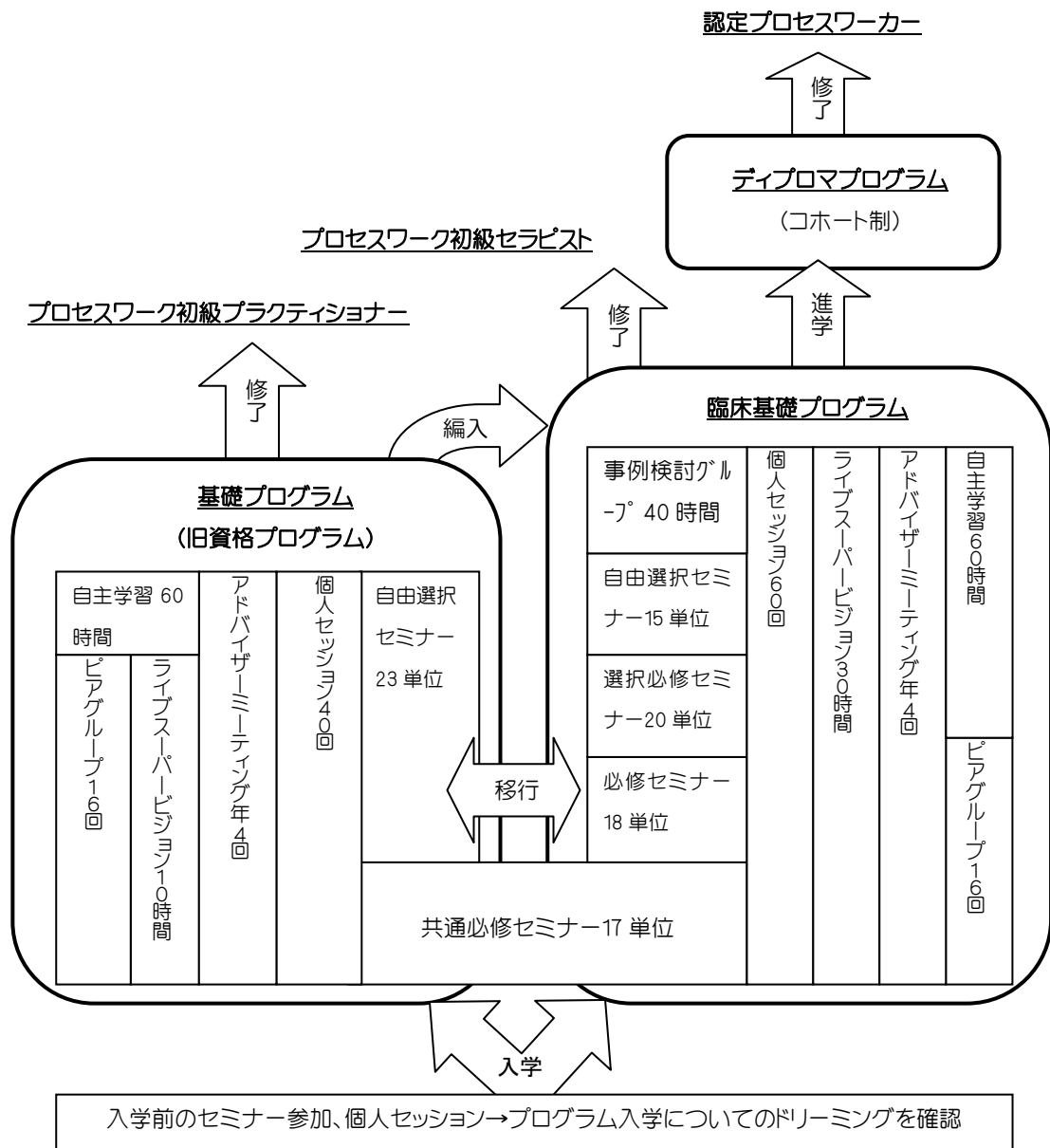
JPWC のディプロマプログラムでは、臨床基礎プログラムの修了を入学要件としています。プロセスワークを身につけるためには数年にわたる深いコミットメントとトレーニングが必要ですが、それがどんな旅になるかは人によって異なり、始めてみないとわかりません。思っていたのとは違う場合も大いにあります。いきなりディプロマプログラムにお入り頂くのではなく、まず臨床基礎プログラムで、プロセスワークをプログラムとして学び、人と関わる仕事の現場で生かすとはどういうことかを 2、3 年かけて十分に体験して頂きたいと思います。プロセスワークがほんとうにご自分の生きる道だと確信されてから、ディプロマプログラムにお入りください。

臨床基礎プログラムで行った学習はすべて、ディプロマプログラムの学習としてカウ

トされます。臨床基礎プログラムはディプロマプログラムの前期課程とお考えください。
 なお、臨床基礎プログラム修了をディプロマプログラムの入学要件とするのは日本プロセスワークセンター独自のもので、プロセス・ワーク研究所（PWI）など海外のディプロマプログラムとは異なります。

修了時には「プロセスワークディプロマ」が授与され、修了者は「認定プロセスワーカー／ディプロメイト」と呼ばれます。

図 2：日本プロセスワークセンタートレーニングプログラムの流れ



Ⅳ.プロセスワークディプロマプログラム

1. プロセスワークディプロマプログラムの特徴

プロセスワークディプロマプログラム（以下、ディプロマプログラム）は、プロセスワークの専門家を養成するプログラムです。現在のところ、プロセスワークについて最上級のトレーニングプログラムであり、修了者にはプロセスワークの全領域において一定の知識と臨床能力をもつものと認められます。

本プログラムは、プログラム修了までに理論と実践の両面をバランスよく総合的に学ぶことができるように組み立てられています。内容的には、プロセスワークの哲学、理論、方法論の専門的かつ最新の知識をまなび、さらにその臨床的応用を、心理的・身体的な健康やターミナル・ケア、コーマワーク（昏睡状態とのワーク）、関係性のワーク、グループワーク、葛藤解決などの各分野において学んでいきます。

扱う対象は幅広いのですが、プロセスワークの基本は個人の心理臨床で培われました。当ディプロマプログラムでは、臨床基礎プログラムで培った知識と実践力をもとに、まず心理臨床の専門家としての力量をのばすことを重視します。その基本力を応用してこそ、関係性やグループの力動をも見抜き、質の高い介入が行えるからです。それは、自分自身に深く向き合い、成長していくことでもあります。本プログラムに入学することによって、学生は自己発見、自己成長、プロセスワークの全体を学び実践していく旅に出発することになります。

ディプロマプログラムはまた、学生がプロセスワークの理論と実践について創造的に思考し、人間のさまざまな体験についての知見に独創的に貢献する能力を身につけてほしいと願っています。そのためこのプログラムでは、定められた履修内容に加えて独習を重視し、またプログラムの最後には研究プロジェクトに取り組むことになっています。

トレーニングは、それ自体が目的なのではなく、世界の中で学生がより広い道を歩んでいく手前にある門のようなものです。サポータティブである一方たいへん厳しくもあるこのプログラムでの学びを通して、皆さんが自分の「個人の神話」とのつながりを深め、自分の中にあるすべての側面を表現し、自分の周囲の人々や世界のドリーミングプロセスを展開できるようになることを私たちは願ってやみません。

トレーニングにおいてファカルティが重視しているのは、次の5点です。

- ・ 学習と研究への総合的なアプローチの実践
- ・ 人間の潜在能力が持つ、感情的、霊的（スピリチュアル）、知的、創造的、社会的な側面に価値をおくこと
- ・ 文化的多様性を大切に考えること
- ・ 多様な学習法、教授法を積極的にすすめること
- ・ コミュニティを重視し、深層民主主義的な生き方をうながすこと

2. プロセスワークディプロマ資格

ディプロマプログラム修了者には「プロセスワークディプロマ」認定が授与され、「認定プロセスワーカー」または「ディプロメイト」と呼ばれます。

「プロセスワークディプロマ」とは、プロセスワーク認定の資格証明証であり、スイスのチューリッヒで設立されたプロセス指向心理学研究協会が1982年に初めて授与して以来、アメリカ、イギリス、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、ポーランドなど世界各国のディプロマプログラムで授与されてきました。この資格は、「クライアントとの心理療法におけるプロセスワークの応用」「グループプロセスや葛藤場面のファシリテーション」「自分自身の成長過程に従うこと」にかかわるスキルが、プロセスワークのトレーニング・コミュニティの厳格な基準に達していることを証明するものです。

ディプロマは、プロセスワークの視点をどれほど理解しているか、スキルやメタスキルをどれだけ習得しているかの程度に基づいて授与されます。それは自覚（awareness）を育む大きなプロセスであり、既定の時間数をこなしたから身につくというものではありません。ディプロマ認定を受けるまでには、プログラムの最低履修時間数を大幅に越えて学習を続けることも少なくありません。また、最終試験に合格できなければ、認定を取れない場合もあります。

3. ディプロマプログラムが対象とする方

JPWC の「ディプロマプログラム」では「臨床基礎プログラム」修了を入学要件の一つとしています。また、学習内容が大学院レベルに相当しますので、4年生大学卒業、またはそれに相当する学力を有する方を対象とします。

その上で、当プログラムは、心理臨床をはじめ医療、福祉、教育、司法、経営などさまざまな分野にプロセスワークの専門家としてかかわりたいという方々を歓迎します。プロセスワークは心理療法として出発しましたが、現在は組織運営や国際紛争まで応用される幅広いアプローチです。心理療法やカウンセリングの分野で働く方をはじめ、看護や医療、ボディワーク、福祉、ソーシャルワークなど心身の健康や地域コミュニティにかかわる方、司法や調停、平和構築など葛藤解決にかかわる方、経営、人事、コンサルタントなど組織にかかわる方、学校やフリースクールなど教育現場に関わる方など、さまざまな職業分野の方々をお待ちしています。

ディプロマプログラムを修了される時には、プロセスワークの多岐にわたる応用領域全般について、専門的かつ実践的知識と能力をそなえた専門家として活動する基礎を獲得されていることでしょう。

4. コホート制

JPWC のディプロマプログラムは、2011 年度以降コホート制を取ることになりました。

コホート（群れ）とは、入学から修了まで一貫して同じメンバーで学んでいくグループのことです。コホート制では、入学希望者がコホートを形成するに十分な人数に達した時に開講し、

修了までメンバーの入れ替えをしません。自分に向き合い、広大な領域を学んでいく旅にとって、同じ仲間とともに学びサポートしあうことは大きな助けになり、集中した密度の濃いトレーニングとなります。

ただし、学生が一定数に達しないと開講されないため、毎年開講されるとは限りません。

5. トレーニングの実施場所と主な連絡手段

5-1. トレーニングの実施場所

学生には、学習の機会となるセミナーやクラス、学生ミーティングなどさまざまなイベントに自分から積極的に参加することが求められます。(ディプロマプログラムのセミナーやクラスの多くはプログラム学生に限られたものですが、一部は、他プログラムの学生や一般の方にも開かれています。)

また、個人セッションやスーパービジョンや学生同士の勉強会なども、自らスケジュールを決め、相手に連絡し、予約を取るなど、主体的にプログラムを進めていくことも必要です。つまり、トレーニングの実施場所は、まずご自宅であり、さらにクラスやセミナーや勉強会などが行われる場所ということになります。

トレーニングセミナーやクラスの多くは東京で催されますが、他の都市で行われることもあります。また、会議電話やスカイプ(章末注参照)、インターネットを使ったセミナーが行われることもあり、この場合は自宅に居ながら電話やインターネットを使ってクラスに参加することができます。

また、在学中のどこかで、米国など海外で開催されるセミナー(ワールドワークセミナーやインテンシブセミナーなど)に参加されることもおすすめします。プロセスワークは多様性を重視するアプローチであり、国際的な多様性を経験することは大きな学びの機会となると考えているからです。

セミナーやクラスの具体的な実施については、JPWC およびセミナーを主催する各認定プロセスワーカーが責任を負います。開講予定のクラスの詳細などは、JPWC の年間スケジュールカレンダー、またはウェブサイト www.jpwc.jp 「セミナー・イベント」のページをご覧ください。また、各セミナーの開催前には、学生向けメールリングリストでも詳細をお知らせします。

*会議電話：同一の電話番号に複数の人が同時にかけることで、まるで同じ部屋にいるかのように話し合うことができるものです。下記の会議電話では電話番号の使用料は無料ですが、その番号までの長距離通話料金あるいは国際電話料金は各利用者負担になります。

- ブラステルチャットカフェ

日本の格安海外電話会社です。東京・大阪・名古屋のアクセスポイントまでの電話料金を負担すれば、会議電話自体は無料で使えます。

www.brastel.com/Pages/jpn/corporate/conference.html

- Phoneconference

北米の会議電話会社です。国際電話料金はかかりますが、会議電話の使用料は無料です。

www.phoneconference.com

*スカイプの会議電話：スカイプというソフトウェアをご自分のコンピュータにダウンロードすることで、同じソフトウェアを入れたコンピュータ同士なら、インターネットを通じて無料で通話できます。複数で会議電話をしたり、ネット通信用ビデオカメラを接続してTV電話として使うこともできます。ただし、上記の通常の電話回線を使う通話に比べて音質が劣ったり、時に途中で切れてしまうことがあります。

www.skype.com

5-2. 主な連絡手段

JPWC の学生の方は日本各地にいらっしゃるため、事務局からの情報提供や事務局との連絡には主に電子メールを使っています。

電子メールのアドレスをお持ちでない方は、入学までに電子メールアドレスを取得し、事務局までお知らせください。

事務局はそのメールアドレスを学生用のメーリングリスト jpwc-cpdp に登録します。このメーリングリストは、事務局からセミナー情報やプログラムのシステムの変更など重要なお知らせをお届けすると同時に、学生同士が勉強仲間を探すなどの場としても使われます。学生用メーリングリストのメールには必ず目を通すようにしてください。

また、新入生歓迎ミーティングや学生ミーティングなどをスカイプの会議電話を通じて行うため、スカイプへの加入も入学前に行ってください。www.skype.com からソフトウェアをダウンロードし、スカイプ名を事務局までお知らせください。マイクとイヤフォン付きのヘッドセットをご購入頂く必要がありますが、通話自体は無料です。

6. 入学手続き

入学手続きの詳細は募集のつど公表される募集要項をご覧ください。ここでは基本的な流れをご紹介します。

6-1 入学の時期

「ディプロマプログラム」はコホート制をとるため、毎年開講されるとは限りませんが、開講する場合は下記の通りです。

入学日：4月1日

申込締切：1月15日(入学書類が事務局に到着している期限)

面接日：2月1日から2月15日の間(面接する認定プロセスワーカーから連絡があります)。

6-2 申込手続き

6-2-1. 認定プロセスワーカーとの入学前個人セッションとレポート送付

入学申込みに先だって、入学に関するご自身の「ドリーミング」をワークするために、認定プロセスワーカーと個人セッションを行ってください。

「ディプロマプログラム」に入学してプロセスワークを学ぶことがご自分の人生の「道」にかなっているかどうか、その準備が意識のレベルだけでなく無意識のレベルでもととのっているかどうか、セラピストとともに確認していきます。無意識のレベルを見ていくには夜見る夢が大きな助けになりますので、「プロセスワーク」や「ディプロマプログラム入学」に関わっていると感じられる夢がありましたらセッションでお話してください。そして、現実的なレベルでも、資金や時間的余裕、日本語だけでなく英語を使うことなどについて、ディプロマプログラムのスケジュールがご自身の生活の中で実現可能かどうかを検討してください。入学がご自身の「夢」に支持されていることが明確になり、ご自分でも確信が持ててから、入学の申込みを行ってください。

入学申込み際には、そのセッションのレポートを、その認定プロセスワーカーから直接事務局あてに送付するよう依頼してください。セラピストは入学の可否について評価を下す立場にないため、このレポートは「推薦状」ではなく、参考資料として扱われます。なおこのレポートの作成に料金がかかる場合もあります。それぞれのセラピストにお問合せください。

- 臨床基礎プログラム修了者は、在学中のメインセラピストとワークするものとします。
- 臨床基礎プログラム修了者でない方が特例により応募を認められる場合は、それに先立って一人の認定プロセスワーカーと40回以上個人セッションを行っていることを条件とし、その認定プロセスワーカーと入学に関する夢をワークするものとします。
- 1回のセッションで「夢」が明確にならない場合は、3回まで行うことができます。

日本語でセッションを行う認定プロセスワーカーの連絡先やプロフィールについては、日本プロセスワークセンターのウェブサイト www.jpwc.jp をご覧ください。在住地域が遠隔地などの理由で対面でのセッションが難しい場合は、電話やスカイプ、ビデオチャットを利用したセッションも可能です。

なお、「臨床基礎プログラム」を修了後から「ディプロマプログラム」入学までの学籍がない期間も、「ディプロマプログラム」入学前1年間に行った個人セッション、スーパービジョン、またセミナーへの参加は、入学後の単位に換算することができます。この入学のためのセッションも、入学後の必修個人セッションの数に含めることができます。

6-2-2. 入学考査料の振込み

入学考査料¥35,000を下記口座に振り込み、それを証明する書類(振込明細書など)を得てください。

- みずほ銀行 北沢支店
普通口座 1137454
口座名義 日本プロセスワークセンター
- ゆうちょ銀行 加入者名：日本プロセスワークセンター
口座番号：10250-92891801

6-2-3. 送付書類

下記の書類を日本プロセスワークセンター事務局宛に送付してください。申込締切日までに事務局必着とします。これらの応募書類は、守秘義務のあるものとして扱われます。

- ① 「ディプロマプログラム」入学申込書
用紙は当センターホームページ www.jpwc.jp からダウンロードできます。
ダウンロードできない場合は事務局までご請求ください。
 - ② 履歴書
学歴や職歴など。形式自由。写真添付のこと。日本語以外の言語を使う能力についても付記すること
 - ③ 認定プロセスワーカーからの入学についての「夢」のレポート
認定プロセスワーカーの任意の書式でかまいません。レポートは認定プロセスワーカーから直接事務局に送るものとします。（「4-2-1 認定プロセスワーカーとの入学前個人セッションとレポート送付」参照）
 - ④ 入学志望理由
A4用紙で2枚、2500字程度で、下記についてまとめてください：
 - ・ 認定プロセスワーカーとワークした夢（プログラム入学に関するイニシャル・ドリーム）の内容
 - ・ 上記の夢のワークを踏まえて、プロセスワークを学ぶことに関わる自分のドリーミングとはどのようなものか
 - ・ プロセスワークをプログラムという枠組において学ぶこと（ディプロマプログラム入学）や認定プロセスワーカーになることに、上記のドリーミングがどう関連しているか
 - ⑤ 小論文
A4用紙で2、3枚、2500～4000字程度で、下記についてまとめてください。
 - ・ ファシリテーターまたはセラピストになるとはどういうことだと考えるか
 - ・ 自分はなぜそれに興味を持つのか
 - ⑥ 自分自身の自主学習、独習の意思や能力についてまとめたもの
 - ・ A4で1枚、1400字以内
 - ⑦ 入学審査料の振込が証明できる書類のコピー
- 送付方法
 - ・ 1)～6)は Eメールに添付ファイルの形でお送りください。それぞれ別ファイルとし、各ファイル名にはご自分の名前を入れてください。
 - ・ 7)は、スキャナーでコピーしたものをEメールに添付するか、ファックスまたは郵送でお送りください。
 - 送付先：日本プロセスワークセンター事務局

email: info@jpowc.jp

fax: 03-3485-4208

郵便：〒156-0041

東京都世田谷区大原1-3-11

一度納入された入学考査料は、入学申込み後に入学面接を辞退されても払い戻しいたしません。「ディプロマプログラム」入学が本当にご自分のプロセスであることをしっかりと確認された上で、入学手続きを行ってください。

6-3. 入学面接と入学手続きの完了

入学の可否を判定するために、下記のような流れで入学面接を行います。

1. 入学委員会

事務局は入学委員会（注2）に全入学希望者の応募書類を送ります。入学委員会は入学希望者の氏名をファカルティのメーリングリストに発表します。候補者とプライベートな関わりがある、またはセラピストであるファカルティはその候補者の担当入学委員（注3）になれないため、辞退する旨をメーリングリストで伝えます。入学委員会は、担当入学委員になれるファカルティの中から、各希望者の担当入学委員2人をファカルティのメーリングリスト上で指名します。そして応募書類を送付します。

2. ファカルティからのフィードバック

その後一週間以内に、各入学希望者について意見のあるファカルティは、担当入学委員に直接、支持や懸念などを伝えます。すべてのフィードバックは守秘義務のあるものとして扱われます。

3. セラピストからのフィードバック

入学希望者のメインセラピストが作成した入学に関するプロセスについてのレポートは、他の応募書類とともに事務局から入学委員会に送られ、入学委員会から担当入学委員に送られます。これも守秘義務のあるものとして扱われます。このレポートは推薦状ではなく、入学のための参考資料となります。

4. 入学面接

すべての入学応募書類、入学考査料、認定プロセスワーカーからのフィードバックがすべてそろったところで、担当入学委員は入学希望者に直接連絡し、入学面接の日時と方法を決定します。面接は1回60分です。そこで入学についての意志とドリーミングのサポートの両面から入学について検討します。1回の面接で確信が持てない場合は、追加面接が必要となる場合があります。追加面接は3回までとします。追加の面接料は別途、一回30,000円を申し受けます。

なお、担当入学委員2人と入学希望者の在住地域が遠く離れているなど対面での面接が難しい場合は、会議電話やスカイプを使用しての話し合いとなります。

5. 入学の可否

入学の可否については、最後の面接から30日以内を目安に、担当入学委員が決定し、

入学希望者に書面（メールを含む）でお知らせします。また、ファカルティのメーリングリストで結果を報告します。そして、入学委員会が事務局に入学確定者の氏名を伝えます。ただしこのプロセスが30日を超える場合もありますのでご了承ください。

6. 入学手続きの完了

入学が許可されたら、入学希望者は初年度納入金を振り込み、振込明細書のコピーを事務局まで送ります（FAXでも可）。納入が確認された時点で、入学が確定します。基本的に、入学期日の一か月前、2月末日または8月31日までに納入が完了するものとしします。

注1) **ドリーミング**：夢が何を勧めているかに耳を傾けることにより、学生がまだ意識化していない背景に潜む方向性を見ていきます。この方向性は本人の意識的な意図を補うものかもしれません。まだあまり意識化されていない傾向性は、夢の中でシンボルや人物像の形で表されることがあります。

注2) **入学委員会**：入学や移籍に関するプロセスをファシリテートします。具体的には、入学希望者からの申込みがあった際に、担当入学委員（注3）を指名したり、入学の過程に問題がある場合に入学希望者や学生のフィードバックを聞いたり、規則を改定するための話し合いをファカルティの中で進めたりします。

注3) **担当入学委員**：それぞれの入学希望者に対して、ファカルティの中から二人の担当入学委員が指名されます。この二人が入学希望者と面接をし、その他の資料（ファカルティからのフィードバックなど）も参考にして入学の可否を決定します。メインセラピストは担当入学委員になることはできません。

6-4.入学の確定と「学生の記録」

入学が確定すると、学生には「学生の記録」をはじめとするプログラムを進めるのに必要な書類一式が届きます。そして、学生とファカルティ専用のメーリングリストに登録されます。

「学生の記録」は、行ったセッションやセミナーを記録しておくためのものです。セッションやセミナーのつど、参加したことの確認として、セラピストや講師のサインをもらってください。スタディコミティが学習の進捗を確認する際や、卒業認定の際の大切な記録となりますので、大切に記録し、保管してください。

なお、「学生の記録」を紛失された場合は、どのような理由であっても、再発行手数料¥10,000がかかります。再発行された「学生の記録」には、それまでに行ったセッションやセミナーを再度記載していただくことになります。JPWC主催のセミナーについては事務局でそれまでのご参加を確認し記載しますが、センター主催以外のセミナーや、個人セッションおよびスーパービジョン等については、各学生の責任において、各セラピスト、スーパーバイザー、講師等のサインを別途もらってください。

6-5 日本プロセスワークセンター以外のプログラムから当プログラムへの移籍および入学

日本プロセスワークセンター以外のディプロマプログラムに在籍中の方が日本プロセス

ワークセンターのディプロマプログラムへの移籍を希望する場合は、次のような手続きが必要です。

1. まず在籍中のプログラムのアドバイザー／スタディコミティと、移籍について話し合ってください。移籍することに同意が得られたら、アドバイザー／スタディコミティから日本プロセスワークセンターの入学委員会宛に直接、自分の学生としての資質や学習の進行状況についての報告書を送ってくれるよう依頼してください。
2. 入学委員会は、日本プロセスワークセンターのファカルティメーリングリストに移籍希望者について伝え、担当移籍委員を一人指名して、移籍希望者の連絡先とともにアドバイザー／スタディコミティからの報告書を送ります。
3. 担当移籍委員は移籍希望者と面接し、日本プロセスワークセンターのディプロマプログラムに入学するためには何が必要かを話し合います。場合によっては、まず「臨床基礎プログラム」への編入を勧めます。その面接費用は入学面接費に準じて 1 回 ¥15,000 とし、移籍希望者が直接入学移籍委員に支払うものとしします。
4. 「ディプロマプログラム」への入学申し込みが認められたら、以降は上記「6-2 申込み手続き」の通り、応募書類を送り、担当移籍委員とは別の「担当入学委員」2 名が指名され、入学面接を受けます。担当移籍委員は上記3の面接の様子をまとめ、入学委員会に送ります。これが「入学のプロセスについてのセラピストからの報告」に該当します。入学委員会はこの報告書と以前のプログラムからの報告書をまとめて、移籍希望者の担当入学委員に送ります。

*ディプロマプログラムを中途退学された方、またディプロマプログラム以外のプログラム（例えばPWIのCertificate Program, MAPW, MACFOC など）を修了している場合も、上記に準じます。以前のプログラムのアドバイザー／スタディコミティから報告書を日本プロセスワークセンターの入学委員会宛に直接送ってもらってください。

*以前のプログラムでの取得単位、セッション等の履修時間数は、40%を上限として当プログラムに移行できます。どの程度移行できるかは、入学を認められた後、スタディコミティとの話し合いによって決定されます。

目安としては：

- 個人セラピー、ライブスーパービジョン、ケースコンサルテーション、ピアグループ、および自主学習の時間数：
当ディプロマプログラムの最低履修時間数の40%を上限として移行を認めることができます。
- セミナーやクラス：
その内容がコアカリキュラムに沿っているかどうかをスタディコミティで検討の上で認めることができます。
- インターンシップ：
臨床インターンシップについては、必修時間数（最低 400 時間、うちクライア

ントと直接会う時間 150 時間)のうち、40% (160 時間、うちクライアントと会う時間 60 時間)を上限として移行が認められます。他プログラムで行ったインターンシップの時間数が 400 時間を超えていても、60%分 (240 時間/クライアントと直接会う時間 90 時間)は J PWC プログラムでのインターンシップとして新たに行うものとします。

ワールドワークインターンシップについては、J PWC では必修時間数を設けていませんが、他プログラムで行った内容をスタディコミティで検討の上、移行できるかどうかを決定します。移行できない場合は新たに別のワールドワークインターンシップを行うものとします。

- スタディコミティ/アドバイザーミーティングの時間数および最終プロジェクト各プログラム固有のプロセスであるため、移行は認められません。

7. コミュニティイベントとオリエンテーション

日本プロセスワークセンターでは、学生がプログラムについてよりよく理解し、また学生同士やファカルティの交流を図るために、下記のようなイベントを行っています。

7-1. 新入生歓迎ミーティング

プログラムに入学されると、直後に (4 月上旬および 10 月上旬) 対面や会議電話による新入生歓迎ミーティングが行われます。プログラム全体やシラバスについて、またこれからの学習について、分からないことや不安な点について、コア・ファカルティが中心となってお答えしたり、みんなで話し合ったりする場として設けられているものです。

この新入生歓迎ミーティングには、他のプログラムの新入生および在籍中の学生も参加します。入学直後の学生にとっては、先輩学生の体験談や、学生ならではの学びの知恵を聞くことができる場でもあります。また、新入学生と先輩学生、学生とファカルティの交流の場、ピア・グループのメンバーを見つける場でもあります。

7-2. 学生ミーティング

プログラムを進めていくにはともに学ぶ仲間が存在が大切な支えになりますが、ふだんは日本各地に散らばる学生とファカルティは、なかなかみんなで顔を合わせる機会がありません。そのため、年に 2 回、学生ミーティングが開催されます。1 回は実際に顔を合わせて、もう 1 回はメーリングリストと会議電話を使って行います。

ミーティングは、当センターのすべてのプログラムの学生とファカルティに開かれています。学習上必要な情報提供や問題点などについての話し合い、学生とファカルティとの交流はもちろん、共に学ぶ仲間としての学生同士のコミュニティを作っていくことを目的としています。会う機会が少ないため、ややもすれば孤立しがちな学生同士が、いろいろな人や立場のナマの声を聞いたり、学習上で困った点について話し合うチャンスでもあります。この場が豊かな交流の場になるかどうか、そしてよりよいプログラム作りができるかどうかは、お一人お一人が参加して下さるかどうかにかかっています。はじめはちょっと面倒に感じられるかもしれませ

んが、どうかできる限りご参加ください。

また、JPWC 学生とファカルティの親睦を深めるために、合宿を行うこともあります。

7-3. ディプロマプログラムオリエンテーション

ディプロマプログラムはコホート制を取り、他のプログラムと大きく違うため、ディプロマプログラムだけのオリエンテーションを入学後に行います。学生がプログラムの目的や 3 年間の進め方、セミナーやオンラインクラスの使い方を理解し、ピアグループを結成することなどがこのオリエンテーションの目的です。スカイプや電話会議を用いて行われます。

8. カリキュラムと修了に必要な単位

ここでは、まずカリキュラムの大枠を紹介し、ついで構成要素のそれぞれについて解説します。

8-1. ディプロマプログラム：「個人のワーク」とコア・カリキュラム

日本プロセスワークセンターのディプロマプログラムは、プロセスワークの専門家として必要な知識と能力を 3 年間集中して学ぶプログラムです。その中心となるのは、学ぶ人の個人的な成長です。そのために自分を磨いていくのが「個人のワーク」です。これには「自分の主観的な体験を発見し理解すること、そしてそれを他者とのワークの中で関連づけながら役立てていくこと」「自然の出来事に対して持つのと同様な畏敬の念を持って、自分への愛情をはぐくみ、自身の中の未知なるプロセスに従うことを学び実践する」などが含まれます。

個人のワークは、自分を導き動機づけるヴィジョンや目的、感情、個人の霊性（スピリチュアリティ）への自覚を育むためのものです。学ぶ人自身のかけがえのない「本性」こそが、プロセスワークの方法とさまざまな介入法を用いる際の鍵となります。また、ディプロマプログラムの学生は、自分の人格を個人史に照らし合わせて探究することも求められています。認定プロセスワーカーとセッションを続けることで、自分が持つそれぞれのテーマを深めていったり、それらを定期的に最後までワークする習慣をつけていくことができるようになるでしょう。

またプロセスワークでは、年齢や人種、ジェンダー、性的指向、国籍などさまざまな社会的アイデンティティの文脈のなかに生きる自分自身を体験し、自覚することをきわめて重要なことと考えています。プログラムでは、多くのセミナーやインターンシップを通して、自分の慣れ親しんだものとは異なる体験や文化的価値観と触れる機会を持つこととなります。その際、自分自身の社会的アイデンティティをより客観的かつ広い視点から見ることを余儀なくされます。そのような体験を積み重ねることによって、最終的には自分の文化や人生において、より周縁化された体験をファシリテートできるようになるのです。たとえばワールドワークセミナーには、様々な民族、地域、文化、社会階級、性的指向性などの背景をもつ人々が参加しますが、このセミナーもまた、他者について学び、個人的な成長を促進させるユニークな機会となるでしょう。さまざまなセミナーやインターンシップは、人類が全体としておかれている状況についての視野を広げるとともに、個人セラピーとは別の意味で、自分自身についての知識を深める助けになります。

このような個人のワークをより深め、また広げていくために、ディプロマプログラムでは下記の領域を「コア（中核）・カリキュラム」としています。

1. プロセスワークの基礎：プロセスパラダイムの理論、哲学、ルーツの理解、およびプロセスワークの実践におけるそれらの応用。
2. 身体のプロセス：身体にまつわる体験の構造と力動の理解、および身体症状やその他の身体に関する現象への取り組みにおける応用、自分や他者の身体についての自覚の促進。
3. ムーブメント・ワーク（動作のワーク）：動作にまつわる体験の理論と実践、および個人の成長やセラピー技法へのムーブメントの応用。
4. 意識状態の多様性：プロセスワークのルーツの一部である老荘思想、シャーマニズム、その他のスピリチュアルな伝統について。また、変性意識状態および極限状態との取り組みに関する理論と実践。
5. インナーワーク：他のあらゆる技法を使って、自分のプロセスについて自分一人でワークする方法。
6. 関係性プロセス：個人間の体験に関する理論、および関係性、カップル、夫婦、家族、セラピストクライアント関係のプロセスとの取り組みにおける応用。
7. グループ・ワーク：グループプロセス、場への自覚 awareness、およびインナーワークについて。グループ・ファシリテーションや、大小の集団やコミュニティとの取り組みにおいては、常に自覚 awareness を保つことが必須であるため、インナーワークはグループワークの重要な一部となる。
8. ビデオ学習：プロセス構造、力動に関する学生の観察力を磨き、それらへの気づきを洗練させる目的で、クライアントとのワークやピアグループのビデオを継続して検討する。
9. 研究法：人文科学における研究法の入門。特にプロセスワークの研究論文に適した研究法に焦点を当てる。研究法に関する基礎的な言語や概念を詳細に検討する。
10. 選択科目：プロセスワークに関わる人々の間ではどうしてもプロセスワークの基礎と応用の研究が中心になるため、それを補う形で、各教師が自分の関心分野、専門研究分野のコースを開催する。学生はプロセスワークに関する自分の視野を広げるために、これらのコースを履修することが望ましい。

8-2. 修了要件の一覧

上記のコア・カリキュラムを実際に学んでいく上で、大きな柱となるのは、1) グループで行う毎月のセミナーとオンラインクラス、2) 個人セラピー（トレーニングセラピー）、3) スーパービジョン、4) 2つのインターンシップ、5) 最終プロジェクトの5つです。そして、それをさらに補うさまざまな要素が組み合わされています。

具体的には、次の一覧表にある項目が修了要件となります。「資格プログラム」「基礎プログラム」「臨床基礎プログラム」など、「ディプロマプログラム」入学前に履修したプログラムにおけ

る取得単位や時間数を含みます。(1 単位は 3 時間のセミナーや学習に相当します。)

提示されている単位数や時間数は、最低限の必修時間数です。実際にはこれらを越えて学習を続けることになります。

表 1：ディプロマプログラムの修了要件一覧

	学習項目	時間 or 単位数	備考
1	スタディコミティミーティング	6 時間	在学中の年 2 回×3 年
2	ピアグループ (トライアド)	31 回(20 単位)	
	ディプロマ在学中	15 回(10 単位)	年 5 回×3 年。修了までに 15 回
	臨床基礎履修済	16 回(10 単位)	臨床基礎修了までに 16 回
3	個人セラピーセッション	200 時間	フェイズ1 試験前に 80 時間。入学前プログラムでの実施数を含む。
4	セミナー	271 単位	
	ディプロマ必修セミナー	171 単位	クローズドセミナー24 回、ミニ インテンシブスーパービジョン セミナー3 回、合宿セミナー3 回
	ディプロマ自由選択セミナー	30 単位	認定プロセスワーカーが行う セミナーはすべて含められる
	臨床基礎プログラム履修セミナー	70 単位	
5	ディプロマオンラインクラス	40 単位	年間 40 時間×3 年。内容がグループ・ ケース・スーパービジョンの 場合もここに含める
6	スーパービジョン	135 時間	最低必修時間数に加えて、自分の 全クライアントについて 5 回会う ごとに 1 回を目安にスーパー ビジョンを受けるものとする
	個人ライブスーパービジョン	75 時間	入学前プログラム履修済を含む
	個人ケーススーパービジョン	40 時間	入学前プログラム履修済を含む
	グループ・ケース・スーパービジョン (事例検討グループ)	20 時間	臨床基礎での必修事例検討 グループを含む
7	臨床インターンシップ	400 時間	
	クライアントとの直接コンタクト	150 時間	
	その他の準備、記録など	250 時間	
8	ワールドワークインターンシップ	40 単位	終了承認をもって 40 単位の授与
9	自主学習	600 時間	オンラインクラスの課題実践を はじめ、最低必修時間数を越えた 自主的な学習すべてを含む。
10	最終プロジェクト	40 単位	論文提出をもって 40 単位の授与
11	試験	20 単位	
	フェイズ1 試験 (中間での振り返り)	10 単位	合格をもって各 10 単位の授与
	フェイズ2 試験 (最終試験)	10 単位	合格をもって各 10 単位の授与

■入学前の学習

他のプログラム修了後、ディプロマプログラム入学前の学籍を持たない期間に行った学習

については、入学前1年間に限り、修了に必要な単位として含めることができます。4月1日入学の方は前年4月1日以降に、参加したセミナー、個人セラピーセッション、スーパービジョンが、修了要件として認められることとなります。これには、入学に関する夢を扱ったセッションも含まれます。

入学前の学習をプログラムの単位としてカウントするには、入学後最初に行うスタディコミティミーティングで「入学前学習の査定書」（用紙は「提出書類用紙集」所収）を用いてそれらを報告し、承認を受けて、「学生の記録」にそのセッションやセミナーを記録した上で、「入学前学習の査定書」を事務局に提出してください。

■日本プロセスワークセンターファカルティ以外の認定プロセスワーカーとのワーク

2007年9月より、学生が当センターファカルティ以外の認定プロセスワーカーによるセミナーや個人ワークを受けることについて、下記のようなガイドラインを定めました。それまでは世界中どこかの認定プロセスワーカーとのセッション、セミナーでもそのまま単位として認められましたが、当センターとして責任をもって学生の学習内容を保証できない場合があることにかんがみ、一定の上限を設けることにしたものです。もちろん、学生がプロセスワークの国際的コミュニティにふれて学びを深めることを妨げるものではありません。

- 個人のワーク、ライブスーパービジョン、ケースコンサルテーション
日本プロセスワークセンターのファカルティ以外の認定プロセスワーカーと行っても、必修時間数のうち40%を上限として認められます。ファカルティ以外の認定プロセスワーカーをメインセラピストにする場合は、プログラム内容や文化的背景など必要な情報をセラピストに、またセラピーの進捗状況をスタディコミティに十分に伝えるのは学生の責任となります。
例：個人セッションの必修200時間のうち80時間まで。ライブスーパービジョン必修75時間のうち30時間まで。ケースコンサルテーション必修40時間のうち16時間まで。
- セミナーやクラス
世界中のどこであろうと、認定プロセスワーカーが行うセミナーは、日本プロセスワークセンターのプログラムの「自由選択セミナー」または「自主学習」の単位として認められます。「必修/必修選択セミナー」に該当させるかどうかは、そのつどスタディコミティと精査の上決定するものとします。
なお、日本プロセスワークセンターのプログラムで取得した単位やセッション時間数が他のセンターのプログラムで認められるかどうかは、そちらのセンターの決定によります。

■言語の必要条件

プロセスワークは国際的コミュニティの広がりの特徴の一つとします。ディプロマを授与される学生は、最終試験までには、英語での簡単な会話ができるようになってください。必要ならば、学習プログラムの最初から英語の習得を自己成長プロジェクトとして取り組むことをお勧めします。ひとつの方法としては、プログラムの最初の年に英語の文献読解に挑戦し

たり、基礎的な語彙や言語運用スキルを身につけた上で、ポートランドのインテンシブ・コースやワールドワークセミナーなど海外でのセミナーに参加することです。さまざまなプロセスワークコミュニティが開催する英語でのセミナーも、世界中の人に開かれています。プロセスワークのネットワークには多くの拠点がありますので、そのウェブサイトをご覧ください。たとえばプロセスワーク研究所（旧ポートランド・プロセスワークセンター）のサイト、www.processwork.org で、他のさまざまなセンターへの最新のリンクを見ることができます。

■心理学の大学院レベルの学習

学生が心理学や精神医学の大学院レベルの学位を持っていない場合は、できればフェイズ1試験の前までに、遅くともプログラムの修了前に、大学院レベルの臨床心理学、人格心理学、発達心理学、精神病理学、心理アセスメントなどの単位を取得してください。例えば放送大学では、18歳以上であれば、正式に入学しなくても科目履修生として大学院のクラスを取ることができます。その時期の開講科目や履修可能科目と本プログラムがお勧めする科目とのすりあわせは、各スタディコミティで行ってください。

8-3. スタディコミティ

プログラム入学後、学生が最初に行うことのひとつが、スタディコミティメンバーの選定です。スタディコミティは、学生自身と、学生が選んだ3人のファカルティからなる、学生の学びの方向や流れを検討する委員会です。

スタディコミティは、学生を現実面とドリッピングプロセスの両方からサポートし、導き、フィードバックを与えます。また学生とファカルティの間をつなぐパイプとしても機能します。学生はコミティから長期に渡りガイダンスを受けながら、自身の学習目標とプログラムの必修条件の両方を満たす、しっかりとした学習計画を立て、進めていきます。プログラムを進める上で学生が何かしら学習に関わる問題に出会った時には、学生とスタディコミティがともに責任を持ってその解決にあたります。そのため、スタディコミティの選定は大変重要な意味を持っています。

スタディコミティの主宰者は、学生本人です。入学後3ヶ月をめぐりにスタディコミティのメンバーを選び、4人が顔を合わせる（または電話会議の）スタディコミティミーティングを実施してください。そこで、各メンバーからのガイダンスをもとに、入学前までの学習を振り返ってどれだけディプロマプログラムの学習として認められるかを話し合い、また自分の今後の学習の方向性について話し合って決めていきます。

メンバーの選定にあたっては、まず各ファカルティと個人セッションを行い、相性などを見ていくことをお勧めします。そして、各メンバーにはそれぞれに機能を持たせ、個別にも相談して、自分の学習の進捗状況を継続的に検討していくとよいでしょう。プログラム全体の進め方を相談するチューター／アドバイザー、スーパービジョンのスーパーバイザー、インターンシップのスーパーバイザー、最終プロジェクトのアドバイザーなどです。

ただし、自分のメインセラピストをコミティのメンバーに加えることはできません。スタディコミティがプログラムの進級・卒業などの許可を出す「評価者」としての機能を持つためです。

スタディコミティ全体として4人で話し合うスタディコミティミーティングは、少なくとも年に2回は行う必要があります。そのほかにも必要に応じて集まってください。たとえば、学生が試験を受ける準備ができていないか、受験後に条件付き合格であればその条件を定められた期日までにクリアしているか、インターンシップとして何をどのように行うか、最終プロジェクトの内容が修了にふさわしいものかなどの承認には、スタディコミティ全員の合意が必要です。

そのため、コミティのメンバーは、ミーティングの予定をどのくらい前もって立てる必要があるかを学生に知らせる責任があります。また、担当学生の学習の進展状況について、他のファカルティに伝えるのもコミティメンバーの責任です。さらにスタディコミティは、学生が試験の申し込みをする前に、受験のための必要条件がすべて満たされていることをファカルティ全体に対して確約する責任もあります。また、スタディコミティは、学生とのやりとりの内容、学生から打ち明けられた内容については、プロセスワーカーとしての倫理規定に基づいて取り扱うことを保証する責任があります。

スタディコミティミーティングを開催する際は、学生はそれぞれのメンバーに料金を支払います。プロセスワーカーによって料金が違う場合がありますので、おのおののワーカーにお問合せください。

スタディコミティのメンバーは、学生がフェーズ2（後期過程）に進んだ後には、基本的には変更することができません。学生とコミティのメンバーが関係性の上で葛藤を持った場合は、安易にメンバーを変えるのではなく、学生が自分自身の葛藤をさまざまなランクの違いを含めてファシリテーションする上級トレーニングの場としてとらえることが求められます。

8-4. ピアグループ（トライアド）

スタディコミティと同じく、入学後すぐに、できれば同じ地域に住むプログラムの学生2人とピア・スタディ・グループ（3人組なので「トライアド」と呼ばれます）を組んでください。同じ地域に学生がいない場合は、別の地域の学生と会議電話やインターネットを利用して行うこともできますが、できれば時には実際に会って勉強会をすることを勧めます。ディプロマプログラムの学生同士で組むことが望ましいのですが、むずかしければ、臨床基礎プログラムの学生でもかまいません。内容は、それぞれがクライアント役、セラピスト役、オブザーバー役になってワークを実践してみたり、コアカリキュラムに関する学習をメンバー各自のニーズに合わせて行うとよいでしょう。1回について2、3時間が目安です。学生はトライアドでの学習を自分で記録・保管し、一年に一度のスタディコミティとのミーティングの際に提出して確認を受けてください。

従前のディプロマプログラムでは修了までに100セッションが課されていましたが、コホート制に移行してグループの比重が増加したのに伴い、トライアドの比重が下がっています。ディプロマプログラム在学中に年間5回、計15回を行ってください。これは最低

必修回数であり、これを越えて何回でも行ってくださってかまいません。

8-5. 個人セラピー（トレーニングセラピー）

個人セラピーとは、認定プロセスワーカーとの一対一のセッションを指します。これらのセッションの中で、学生は自分自身のプロセスに従い、取り組むことを学んでいきます。学生自身がクライアントとして自分自身と向き合う個人セッションは、人にかかわるアプローチのトレーニングとして大変重要です。プロセスワークに限らず、対人援助や自己成長に関わるスキルや考え方を学ぶことは、それを使う自分自身の内面と向き合い、自覚し、はぐくんでいくことと深く関わっています。セラピーを受ける過程を通して、学生はプロセスワークにおけるクライアントの役割を体験し、感情、対人関係、知性、霊性（スピリチュアリティ）などのさまざまな側面において、自己の成長について理解を深めていくことになります。

学生は、ファカルティの中からひとり、メインセラピストを選びます。最初にセラピストを選ぶ時、特定のトピックについてその分野を得意とするセラピストとのワークから学びたいなど明確な学習目的がある場合などは、他のセラピストとのセッションを行ってもかまいません。ただし、基本的には一人のセラピストとプログラム修了まで一貫してワークするものとし、他のセラピストとセッションを行う場合はそれについてメインセラピストと話し合っておくことを勧めます。

ディプロマプログラムでは、個人セラピーを最低200時間受けることが必修となっています。必修時間の長さは、このプログラムが個人の成長と発達にいかに関心を置いているかを示すものです。このようなアプローチは、「セラピストの個人的成長の問題は、クライアントとの関係と根本的に切り離すことができないものであり、セラピストの独自の方法やスタイルと密接に関わっている」という信念に基づいています。

プロセスワーカーがいない地域の学生は、「電話セッション」「プロセスワーカーが自分の地域を訪れた際の対面面接」「自分の居住地以外の場所を訪れた際に現地のプロセスワーカーとのセッション」の3つを組み合わせるとよいでしょう。

8-6. ディプロマ必修クローストセミナーとオンラインクラス

コア・カリキュラムとして学ぶべき領域についての理論的理解と体験的学習は、対面で行うセミナーと、そのテーマに連動したオンラインクラスを大きな柱として行います。月にテーマを設け、週末二日間の対面でのセミナー月1回と、インターネットを使ったクラス月2回を1セットとして、そのテーマを深めていきます。

セミナーとオンラインクラスはディプロマプログラム学生のみを対象とし、同程度の実力を持った者同士が切磋琢磨するトレーニングの場所となります。

●セミナー

週末二日間のディプロマ必修クローストセミナーを年9回（うち1回は2泊3日の合宿セ

ミナー)行います。また、年1回のミニインテンシブスーパービジョンセミナーへの参加を必修とし、その際には他のプログラムの学生や一般の方との合同で、さまざまな方たちとのライブ・スーパービジョンを行います。

セミナーでは、対面でしか伝えられない繊細なスキルやメタスキルを体験的に身につけることを重視します。スーパービジョンをベースに学生一人一人に焦点をあてると同時に、学びをグループでシェアしていきます。1年目は、年度末に行うフェイズ1試験の範囲の知識と実技を洗練させ、2年目3年目ではスーパービジョンを中心に、実践的かつ詳細な知識とスキルの獲得をめざします。

何らかの事情で必修セミナーに出られない場合は、スタディコミティと相談の上、代替と認められるセミナーへの参加などを行うものとします。

●オンラインクラス

対面セミナーの行われる月に、オンラインクラスも月2回行われます。セミナーのテーマと連動して、さらなる知識の理解や拡大深化をめざします。英語文献を含めた課題図書や、学生それぞれに研究テーマが指定され、その発表が行われることもあります。

2年目は、月2回とも、継続的なグループ・ケース・スーパービジョンを行います。ただし、セミナーについての質疑応答の時間も設けます。

3年目は、月2回のうち1回はグループ・ケース・スーパービジョン、もう1回はセミナーのテーマについての質疑応答や、最終プロジェクトの経過発表など、理論的な学びのサポートにあてられます。

なお、オンラインクラスでのグループ・ケース・スーパービジョンは、「オンラインクラス」としてカウントされ、ケース・スーパービジョンの時間としてはカウントされませんので、ご注意ください。

8-7. スーパービジョン

対人援助の現場を想定して行うスーパービジョンは、自分のスキルやメタスキルを磨く重要なトレーニングです。ディプロマプログラムのクローズドセミナーはグループ・スーパービジョンの場でもありますが、それ以外にも、学生各自のニーズに従って、個人スーパービジョンを積極的に行ってください。

学生一人一人が個人スーパービジョンを行うのが基本ですが、2~5人程度の自主的なスーパービジョングループを作り、グループ・スーパービジョンを行うことも可能です。グループの中でも個人として50~60分自分がワークすれば、個人スーパービジョン1回として認められます。ただし、自分の課題にほんとうに深く向き合うためには、ライブ・スーパービジョンの後にクライアントにも退出してもらい、スーパーバイザーと一対一でワークすることもお勧めします。

スーパービジョンには、次の三つの形式があります。

A) 個人ライブ・スーパービジョン

学生自らがセラピスト役となり、スーパーバイザーの前で実際にワークを行い、フィー

ドバックを受ける形式です。学生は自分のワークへのフィードバックをその場で受けることができ、スーパーバイザーも各学生に適した学びについて本人と話し合うことが可能となります。

プロセスワークのトレーニングの特徴のひとつは、「ライブ・スーパービジョン」を重視することです。シグナルやフィードバックの見方、プロセス構造や介入の見立てなど具体的な臨床能力について詳細な個人指導を受けることができるため、もっとも効果の大きな学習方法の一つです。場に起きている「プロセス」をどう見立て、どうかかわって行けるのかを、そこにいる自分自身のありかたを含めて、具体的にその場に即して学び、自由に話し合っ深めていく、生きた学びの機会です。(クライアント役には、深い自己開示が起こる場合もあるため、その場に起きたことをご自身の責任の中で扱える方をお願いしてください。基本的には学生同士で行います。)

ライブ・スーパービジョンは、修了までに最低 75 時間行ってください。

B) 個人ケース・スーパービジョン (ケース・コンサルテーション)

ケース・スーパービジョンとは、学生が自分のクライアントとのワーク (ケース) をクライアントのいないところでセラピスト/スーパーバイザーと話し合う形式です。これは転移・逆転移の問題を検討したり、短期・長期のセラピー目標、クライアントとのワークにまつわる疑問や困難な場面などについて話し合う機会となります。ケースについて報告することが振り返りをうながす重要な機会となるだけでなく、ケースをプロセスワークの視点で考え、またロールプレイを通してクライアントの立場になってみることで、自分がどこで先に進めなくなってしまうのかを検討することなどを通して、ケースについても、また自分自身についても、理解を深めていくことができます。

個人ケース・スーパービジョンは、修了までに最低 40 時間行ってください。

また、この最低必修時間数にかかわらず、学生は自分が関わる全クライアントについて、継続的スーパービジョンを受ける責任をもちます。目安は、クライアントとのセッションを 5 回行うごとに 1 回のスーパービジョンを受けることです。

C) グループ・ケース・スーパービジョン (事例検討グループ)

さまざまな参加者が自分のケースを持ち寄る事例検討グループは、自分以外の視点や状況、クライアントへの関わり方を知り、深めるための素晴らしい学びの場です。臨床基礎プログラムでは富士見ユキオの事例検討グループへの参加を必修としていましたが、ディプロマプログラムでは必修とはしていません。ただ、多様なケースについて知るために、引き続き富士見ユキオの事例検討グループに参加することもお勧めします。

8-8. フェイズ1 試験 (中間での振り返り)

ディプロマプログラムのトレーニングの前半は「フェイズ1」、後半は「フェイズ2」と呼ばれます。フェイズ1は、臨床基礎プログラムで培った理論的理解と基礎的運用力をさらにしっかりと、プロセスワーク全般に対してつけていく時期です。フェイズ2は、その基礎の上に立ち、実践力をさらに高め、深化させていくことをめざします。

2つのフェイズを分けるのが、「フェイズ1試験」です。フェイズ1試験は「中間での振り返り」とも呼ばれます。ディプロマプログラム入学以前からの学習を振り返り、次に進む準備ができているかどうか、自分を総ざらえしてみるよい機会として設定されているからです。フェイズ1試験に合格すると、学生は次段階のトレーニングに進む準備ができたことを自分にも周囲にも知らしめることになります。

学生は、フェイズ1の期間中に、次の二つの形式のどちらかを選んで、「フェイズ1試験」を受けます。

- A) 準備のできた科目から、学生自身が試験官およびバイシツパー（試験にすべて立ち会い、学生への不利がないかを期す同僚学生）のスケジュールを調整して試験を実施
- B) コホート1年目の年度末に7科目まとめて実施

判定は、合格、条件付き合格（課題提出などある条件をクリアすれば合格）、不合格の3段階です。不合格の科目があった場合、再受験することができますが、次のような条件があります。

- 2科目以上不合格の場合は全科目を再受験
- ひとつの科目で2回不合格となった場合は退学

試験科目は下記の7つです。

1. プロセスワークの基礎理論と夢のワーク
2. インナーワーク
3. 身体症状とボディワーク
4. ムーブメント・ワーク
5. 意識の諸状態（変性意識状態と極限意識状態）のワーク
6. 関係性のワーク
7. グループ/ワールドワーク

上記7科目はすべて口頭試験の形で行われます。上記の各科目の理論を十分に理解し、初歩的なワークができることが要求されます。また、各テーマを学際的、歴史的文脈において議論する能力、理解力を示すことも期待されています。日本ではなじみのない形式ですので、学生は事前に口頭試問に答える練習をしておくことをおすすめします。

試験科目の詳細と試験範囲についてはこのハンドブックの付録を参照してください。試験科目、試験範囲、受験手続きについては、変更になる可能性もありますので、学生は各自最新の情報を確認するようにしてください。

■受験許可

上記 A) の形式で受験するためには、スタディコミティからの承認が必要です。また、

受験前までに認定プロセスワーカーとの個人セラピーを最低80時間、スーパービジョンを25時間受け終わっていることが条件となります。

また形式A)、B)を問わず、学生が心理学や精神医学の大学院レベルの学位を持っていない場合は、中間試験の前までに大学院レベルの臨床心理学、人格心理学、発達心理学、精神病理学、心理アセスメントなどの単位を取得しておいてください。(例えば放送大学では、18歳以上であれば、正式に入学しなくても科目履修生として大学院のクラスを取ることができます。その時期の開講科目や履修可能科目と当ディプロマプログラムがお勧めする科目とのすりあわせは、各スタディコミティで行ってください。)

何らかの事情で中間試験に間に合わない場合は、その後の取得計画についてスタディコミティの承認を受け、履修後にスタディコミティの承認を受けてください。

■試験官および受験手続き

上記B)の形式の場合は、学生が事務局に受験申込み書類一式を提出して受験料を払い込み、またスタディコミティが事務局に受験推薦状を提出した後、試験の最低2ヶ月前までに、各科目の試験官が割り当てられます。試験官は専門分野に基づいて割り振られます。公正性を確保するため、担当試験官を変更することは許されていません。

学生は担当試験官が決定した段階で各試験官と連絡を取り、特に重点を置くべき部分があるかどうかを試験官と確認し合うことを強くお勧めします。

なお、各試験には、中立的に観察する立場として、すでにフェイズ1試験を通過した学生(いない場合はスタディコミティが承認する学生)が一人、「バイシツアー」として同席します。

■評価方法

試験は、プロセスワークの理論および初歩的な実践について、学生の知識を評価するために行います。またプロセスワーク理論を他の学問領域と比較・対照・組み合わせる能力や、より広い文脈においてそれらを理解する能力も試されます。試験内容の概略は「評価ガイドライン」にまとめられています。(付録参照)

試験の合格基準は主に、質問の少なくとも75%に正しく答えられることです。ガイドラインに述べられている試験範囲について十分な知識を示せない場合は、再試験をすることもあります。

試験の後には、受験生・試験官・オブザーバーの全員が「試験ミーティング」に参加することが義務付けられています。このミーティングは試験のプロセスについて話し合う場です。試験で示された学生の能力、学生または試験官の側に起きたあらゆる懸念や問題、試験中の試験官の能力など、試験のあらゆる側面について話し合うことができます。そして最後に、学生の成功を祝福します。試験ミーティングでは、試験のプロセス全体についても、自由に見直し話し合うことができます。

フェイズ1試験の後には、フィードバックをうけるためにスタディコミティとミーティングをもってください。ここで学生の学習プロセス全体を検討し、次に学ぶべき領域を決めていきます。ミーティングの結果は新しい学習計画としてまとめてください。

試験の運営方法等について意見や提案がある場合は、試験委員会にお知らせください。

試験委員会は、試験の運営方法の策定から実施に到るまで責任をもつファカルティです。誰が試験委員であるかは事務局におたずねください。

フェイズ 1 試験は、試験準備の時間も含め、全科目合格をもって 10 単位を授与します。

8-9. インターンシップ

フェイズ 1 試験に合格しフェイズ 2 に進んだら、インターンシップを開始してください。インターンシップは、学生一人一人がプログラムで学んだことをそれぞれの現場で実践し、そこから学んでいくための機会です。一つのプロジェクトまたは場所で最後まで終わらせることもできますが、幅広くさまざまな状況での経験を積むために複数のインターンシップを組み合わせることもできます。インターンシップごとにスーパーバイザーを置き、期間中はスーパービジョンを定期的に行って学びを深めスキルを磨いていきます。

具体的にどのような活動をインターンシップとして行うかは、スタディコミティで検討し、全員一致で承認する必要があります。できれば、最終プロジェクトに有機的につながるインターンシップにすることをお勧めします。困難があればコミティメンバーのサポートを受け、また終了後にどのような学びが得られたかについてもスタディコミティにフィードバックしてください。

各インターンシップについては、スタディコミティまたはファカルティ内から適切なスーパーバイザーを選んでください。もし適切な人材がいなければ、それに相当する教授能力を持つ人をスタディコミティの承認の上で選んでください。

インターンシップには次の二つの種類があります。

A) 臨床インターンシップ

心理臨床の実践に重きを置いたインターンシップです。グループファシリテーションの実践はむしろワールドワークインターンシップに属しますが、対人援助の現場としてグループを使う場合は臨床インターンシップとして認められます。心理臨床のセラピストとして、あるいはグループのファシリテーターとしてクライアントと向き合い、その痛みや苦しみの緩和や課題解決をお手伝いするとはどういうことか、どんなことにつまづき、どうすればそれをクライアントの役に立つ形で生かしていけるのか、実際に経験することを通して学んでいきます。医療機関、社会福祉機関、ホスピス、学校、企業組織、あるいは自立したコーチングなど、ご自分のニーズと関心に従って適切な場所でインターンシップを行ってください。

最低 400 時間行うことが必修となります。そのうち 150 時間以上はクライアントと直接会う（コンタクトする）時間とします。残りの時間数には、スーパービジョン、スタッフとのミーティング、コミュニティへの働きかけ、書類作成の時間などが含まれます。

各インターンシップについては、必ず文書による評価を作成し、またそのインターンシップのスーパーバイザーとのフィードバックセッションを行ってください。そしてスタディコミティに報告してください。

B) ワールドワークインターンシップ

ワールドワークインターンシップとは、世界の多様性についての意識を自分自身および周囲のコミュニティにおいて高めるために行うプロジェクトです。学生自身が慣れ親しんだ環境以外の場所で過ごし、ふだんの自分が持っている高いランクや力が失われるような立場に身をおいたり、自分の住む地域に異なった文化や価値観をもたらす対話を促進するプロジェクトを行うなど、さまざまな形態が可能です。未知の領域に飛び込むことで、社会文化的状況がどのような心理的影響を与えるか身をもって体験することをお勧めします。

プロセスワークでは、個人の心理臨床であれグループファシリテーションであれ、そのクライアントが置かれている大きな文脈（社会文化状況や世界情勢を含めて）を見通し、「今ここ」で起きていることを全体システムの中で理解することを重視します。そのためには、セラピスト／ファシリテーター自身が社会文化状況の中の多様な立場や視点をできる限り体験的に理解し、自分自身のふだんの立ち位置を他者の立場から眺め、さまざまな立場同士の関わり合いの様相を全体として理解できるようになることが大きな助けになります。

ディプロマプログラムでは、学生がプロセスワークの学びを活かしてそのような多様性の体験を自らデザインし実践していくこと、そのような気づきを生み出す場を社会の中に創り出していく活動を促すために、ワールドワークインターンシップを重視しています。特に、日本という文化的に同質性の高い地域で生まれ育った方には、言語や慣習の壁を越えて多文化をしっかりと体験することをお勧めします。そこに豊かな気づきと全体性を深く体験する可能性が大きくひらけているからです。2年に1度開かれる大規模なワールドワークセミナーへの参加をワールドワークインターンシップの一部に組み込むことも可能です。

ワールドワークインターンシップにはさまざまな形態がありうるため、時間数としては規定はありませんが、目安としては120時間ほどを考えてください。実践の終了をもって、40単位が授与されます。

8-10. 自主学習

ディプロマプログラムでは、学生が自主的に行う学びを重視しています。上記の形式に当てはまらないもの、あるいは上記の最低必修時間数を越えて学んだ時間、オンラインクラスの課題達成のために費やした時間、さまざまな読書、学生同士の研究会やディスカッション、自身が企画するセミナーや創造性を花開かせる発表会など、さまざまな活動がプロセスワークの学びを深め、広げていきます。それらをカウントするのがこの「自主学習」の時間です。ご自分の活動内容とおおよその時間数をこのカテゴリーに記録しておいてください。

8-11. 最終プロジェクト

最終プロジェクトとは、ディプロマプログラムで学んだことを一つの形にまとめるプロジェクトです。形式は学術論文の形が一般的ですが、フィルムやパフォーマンスその他の創造性豊かな形式でもかまいません。論文の形をとる場合は修士論文に等しいレベルが要求されます。その他のプロジェクトの場合は、作品またはパフォーマンスについて短いながら質の高い論文を伴い、かつ事前にスタディコミティの承認を受けておく必要があります。

これは学生が自分の学びやトレーニングを創造的で学問的なプロジェクトの形に変え、プロセスワーク全体としての知に貢献する機会でもあります。プロセスワークの理論的な枠組に基づき、学生独自の思考や学びを証明するものでなくてはなりません。

学生は、入学後できるだけ早い時期に、最終研究プロジェクトについてスタディコミティと話し合い、どのような内容にするかを決定し、スタディコミティ全員の承認を得てください。そして、スタディコミティのうち一人を、プロジェクト全体を通じて学生を見守る最終プロジェクトアドバイザーとして選んでください。その後、論文の場合は第一稿をスタディコミティ全員に提出し、全員からのフィードバックを受けた上で、完成形を最終プロジェクトアドバイザーに提出します。アドバイザーが完成を承認したら、他の2人のメンバーがその読者または観客になり、最終プロジェクトの終了の承認を行います。

学生は、コミティがその成果を注意深く検討できるように、提出から結果の承認まで少なくとも一ヶ月の期間を与えてください（通常はスタディコミティミーティングで承認されるので、ミーティングの一ヶ月前には最終結果を全メンバーに渡すことになります）。

最終プロジェクトに対しては、完成形（論文、作品、その他）の提出とスタディコミティの承認をもって、40単位が授与されます。

8-12. フェイズ2試験（最終試験）

ディプロマプログラムの3年目は、学びの最終評価期間でもあります。学生本人は自己評価という形で、スタディコミティおよびファカルティ全体は学びの評価という形で、学習の進行状態について全般的なフィードバックをします。学生は、最終評価期間を通して、スタディコミティがさらなる研鑽を積む必要があると判断した領域での学びに取り組みます。自信がないと感じる領域でインターンシップをしたり、さらにスーパービジョンを受けたり、研究プロジェクトを完了させたりすることになるかもしれません。

フェイズ2試験（最終試験）は8科目あり、そのうち4つは年度末にまとめて行われます。残りの4つは、3年目の間に、2回のスーパービジョンの形で、学生自身が主催

者となって試験官 2 人とバイシツアアのスケジュールを調整して実施します。2 回のスーパービジョンは一定期間をあけて実施し、その間の学生の成長をも図るものとします。

最終試験は学生の能力をはかるもので、プロセスワークのあらゆる領域での考査が行われますが、意図としては、学生の達成したことを祝福しようとするものです。ただし、フェイズ 1 試験と同じく、2 科目不合格であれば全科目の再受験が必要となり、また不合格が 2 回続くと退学となります。

スーパービジョンの形で実施する試験は、次の 4 つの予定です。

1. 自分が当事者である葛藤のワーク
2. インナーワーク
3. 長期的なケース分析とビデオ分析
4. 変性および極限意識状態のワーク

3 年目の年度末に集中して行われる試験は、次の 4 つの予定です。この試験は、1 科目 45 分の予定で、学生一人に対して、試験官二人とバイシツアアが同席して行われます。

5. 個人の夢のワーク
6. 個人の身体症状のワーク
7. 関係性（カップル）のワーク
8. グループワーク

8-13. ディプロマの授与

フェイズ 2 試験（最終試験）の 8 科目についての評価が終わったところで、試験官と学生はその結果について話し合います。すべてに合格という評価が定まり、また最終プロジェクトの完成形が提出されると、学生に「プロセスワークディプロマ」が授与されます。

なお、日本プロセスワークセンターは現在のところ、いかなる国家資格や全国的資格授与組織とも提携しておりません。

9.学籍について

9-1 在学年限

コホート制のディプロマプログラムは基本的に 3 年で修了するものとし、何らかの事情で学籍を延長する場合には、半期ごとの学生登録料を支払うものとします。そして、在学年限を 10 年と定めます。これは、入学後 10 年を経ても修了に至らない場合は、その学生にはディプロマプログラムよりもっとふさわしい別の道があるのではないかと考えるためです。

9-2 休学

ディプロマプログラム在学中は、妊娠出産や大きな病気、家族の介護などの深刻な事由がある場合にのみ休学が認められます。フェイズ1、フェイズ2の各期間につき1回、期間は6カ月または1年とします。休学中の学生登録料は、6カ月の場合¥12,500、1年の場合¥25,000とします。休学期間は上記の在学期間には含まれません。

休学を希望する場合は、学生はまずスタディコミティと休学が本当に自身のドリーミングにかなっているかどうかを話し合ってください。コミティから全面的な承認を受けた場合にのみ認められます。休学届にコミティ全員のサインを受けて、事務局に提出してください。

もし学生本人が何らかの事情で手続きを行えない場合は、スタディコミティ全員が責任をもって休学を事務局に通知するものとします。

休学期間中に行った学習（セミナー、スーパービジョン、インターンシップ等）はいずれも、修了のための単位や学習内容としては認められません。また、試験のバイシツァーや、日本プロセスワークセンター主催セミナーのアシスタントをすることも、自身の学習の進展状況や受験資格の有無を話し合うためのミーティング（スタディコミティ・ミーティングなど）を行うこともできません。唯一の例外は個人セラピーセッションです。休学期間中に行った個人セッションはプログラム修了に必要な時間数として認められます。

学生が日本プロセスワークセンターに対して未納金がある場合には、休学開始前までに、未納分を全額支払ってください。

9-3 復学

休学期間を終えて復学する際は、できれば休学期間が終了する前にスタディコミティミーティングを行い、休学期間の振り返りと、復学してからの学習の方向性を話し合ってください。復学についてスタディコミティの承認を得て、復学届を事務局に提出してください。

学生が日本プロセスワークセンターに対して未納金がある場合には、復学前に、未納分を全額支払ってください。

9-4 退学と再入学

学生が退学を希望する場合、あるいは余儀ない事情で退学に至った場合は、スタディコミティミーティングを行い、退学がほんとうに学生の道であるか、またプログラムでの学びの意味を、スタディコミティとよく話し合った上で決定してください。そして、スタディコミティの承認を受け、退学届を事務局に提出してください。

学生本人が何らかの事情で手続きが行えない場合は、スタディコミティ全体の責任として退学を事務局に通知するものとします。

学生が日本プロセスワークセンターに対して未納金がある場合には、退学前に、未納分を全額支払っていただきます。

一度退学されると、仮に再入学される場合、もう一度通常の入学審査が必要となります。

10. スカラシップ

プロセスワークのトレーニングは、その人の性別、人種、年齢、収入にかかわらず出来るだけ多くの人に開かれており、トレーニングを始める鍵となるのはその人のドリーミングプロセスでなければならないと当センターでは考えます。そのため、私たちはささやかながら「ワークスタディ制度」のようなスカラシップを設けています。学生は、経済援助を必要とする状況に応じて、セミナー等についてスカラシップの適用を相談することができます。その内容は申請する個人の経済状況などによって決定されます。当センター主催セミナーについてワークスタディを希望される方は、事務局までご相談ください。

また、認定プロセスワーカーによっては、セッション料金に学割を設けたり、スライディングスケール(クライアントの収入によってセッション料を決定する方式)を設ける場合もあります。

11. 学生登録料

学生登録料は、1年間の学籍を維持するために必要なものです。その年度に納入された学生登録料で学籍を維持できる期間は、4月1日から翌年3月31日までです。半期(6か月)ごとの分納も可能です。

学生登録料を滞納されると、この期間に受講されたセミナーや受けられたセッション、スーパービジョンを単位とすることができなくなります。また、1年間学生登録料を滞納されると、プログラムでの学習継続の意思がないものと判断し、翌年の3月31日をもって自動的に退学とさせていただきますので、ご了承ください。継続の意思はあるものの、何かしらのご事情がある場合は、事務局までご遠慮なくご相談ください。

12. ご連絡・お問い合わせ先

日本プロセスワークセンター事務局

〒156-0041 東京都世田谷区大原 1-3-11

E-mail: info@jpwc.jp

Website: www.jpwc.jp

Phone & Fax: 03-3485-4208

* 電話受付：祝日を除く毎週金曜 10:00~13:00、14:00~17:00

13. 各種お振込先

各種のお振込は、下記までお願いいたします。

- みずほ銀行 北沢支店
普通口座 1137454
口座名義 日本プロセスワークセンター
- ゆうちょ銀行 加入者名：日本プロセスワークセンター
口座番号：10250-92891801

巻末資料 I
日本プロセスワークセンター
コホート制ディプロマプログラム履修費用

1. 一括して年度初めに納入する費用

初年度：563,000 円

二年度：563,000 円

三年度：563,000 円

- 内訳：• 年間登録料 50,000 円
- 初年度セミナー受講料：280,000 円（35,000 円×8 回）
 - 合宿セミナー費用：50,000 円（宿泊食費実費別）
 - ミニインテンシブスーパービジョンセミナー：63,000 円
 - オンラインクラス：120,000 円（1 回 6,000 円×20 回）

半期毎 2 回の分納が可能です。この場合、分納手数料 2,000 円が発生します。
2 月末に第一回の支払い 282,000 円、8 月末までに第 2 回の支払い 283,000 円（手数料込）をお振込みください。

2. 個別に支払う費用

上記に含まれないセミナー、自由選択科目、個人セラピーおよびスーパービジョンなどの参加費は、その都度お支払いいただくこととなります。

下記は、ディプロマプログラムの最低必修時間数をもとに算出した、臨床基礎プログラムなどですでに履修したセッションやスーパービジョンを含んだ金額を一例として記載しています。あくまで参考であって、自由選択セミナーやピアグループ、インターンシップなどにかかる費用は、状況によって大きく異なるため、ここにあげていません。

1. 個人セラピー：200 回/2,000,000 円～4,200,000 円
2. 個人スーパービジョン：115 回/1,150,000 円～2,415,000 円
3. スタディコミティミーティング：6 回/¥180,000

*1 回のセッション料：10,000 円～21,000 円

個人セラピーや各種スーパービジョンを受ける際にセッションごとにかかる費用。各認定プロセスワーカーによって料金が異なります。（スタディコミティミーティングは、3 人のコミティメンバーの 60 分のセッション料を各 ¥10,000 として算出しています。）

巻末資料Ⅱ

日本プロセスワークセンタースタッフ一覧

(2011年3月現在。項目内50音順。近日改定予定)

1) ファカルティ

- コアファカルティ
桑原香苗 トレーニングディレクター (面接室カフェ香庵)
富士見ユキオ (富士見心理面接室)
横山十祉子 事務局長 (TY-Practice)
- ファカルティ
坂元仁美 (Inner Awareness)
- 準ファカルティ
田所真生子
平井みどり
- 学生担当
桑原香苗
坂本仁美

2) 特別アドバイザー

岸原千雅子 (こころとからだの相談室アルケミア)

3) 理事

青木聡 (大正大学准教授)
詠孝 (心理・教育相談室 TAKA)
諸富祥彦 (明治大学教授)

4) 倫理委員会

- 外部委員
濱野清志 (京都文教大学教授)
村川治彦 (関西大学准教授)
- 内部委員
横山十祉子

5) 事務局

東條温子

巻末資料Ⅲ

日本プロセスワークセンターディプロマプログラム フェイズ1 試験（中間の振り返り）のガイドライン

*下記は、2007年4月時点でのフェイズ1 試験のガイドラインです。

2011年度のフェイズ1 試験は、小さな変更はありますが、ほぼこのガイドラインに沿って行われます。2011年度の詳細は実施前に試験ガイドラインを配布しますが、それまでは、こちらを参考としてお使いください。

中間試験は「学びの中間地点における振り返り」という意味を持ち、学生のスキルおよびメタスキルの成長と、プロセス理論およびその関連諸分野との関係への理解を深く見ていくものとして設定されています。そのため、この振り返りに伴う学生への評価は、試験官から学生個人に向けた詳細なフィードバックという形で構成され、それが学生の次の学習段階のための学習契約の中に盛り込まれます。

受験手続き：中間試験は、プログラム入学以降最短で1年半後に、スタディコミティの推薦によって受けることができます。学生が基礎資格プログラムを修了している場合は、試験までの期間をスタディコミティの承認のもとに短くすることができます。なお最終試験は、中間試験を受けてから最低2年経たないと受けることができません。

中間試験では7つの領域の試験があります。受験者は一人ずつ6つの基本領域について各1時間の試験を行い、最後に受験者全員が一つのグループとなって3時間のグループワークの試験を行います。学生はスキルとメタスキルを評価されます。そこには、プロセスに従う能力、プロセスワークの理論的知識、心理学一般や他の心理療法諸流派とプロセスワークの関係についての理解などが含まれます。またグループワークの領域でのスキルおよびメタスキルも評価されます。

関東以外の地域で一人で学んでいる場合など学生に特別なニーズがある場合は、その学生のスタディコミティの提案に従って上記以外の方法も作り出すことができます。

中間試験は、学生本人、試験官、スタディコミティのメンバーがこのプログラムにおける学生のそれまでの学習状況を詳しく知ることができるようにデザインされており、試験官からの詳細なフィードバックに重点がおかれています。試験の結果学生の知識に不足があることが示されれば、学生は再試験か、再試験に代わってあるいは加えて、試験官との間で決められた課題を達成するよう求められることもあります。試験官は、課題のスーパーバイズおよび課題の達成に対し、またその後の学習上の示唆についてスタディコミティと連絡を取ることに対し、責任を負います。

試験を好結果で終えたら、または課題を達成したら、学生とスタディコミティは学習計画を作成します。この計画は、中間試験でのフィードバックや経験を踏まえて次の学習段階の構造を決めるものです。この段階には通常、スーパービジョンを受けながらクライアントとワークすること

が含まれます。

試験の合格基準

以下に試験の各領域の試験範囲や学習内容を示します。中間試験は、学習の最初の段階を画すものであるため、個人やカップルとのワークを最後までやりきるのに必要なスキルやメタスキルを修得したり示したりすることは求められません。学生に必要なのは、プロセスワークの基本的な考え方を理解することです。そこには、プロセスの構造を見分け、感覚に根ざした情報の展開が始められる能力と、またその人を全体として尊重することや未知のものに対する興味というメタスキルが含まれます。

プロセスワーク理論の基本をしっかりと理解することに加えて、ひろく心理学全般や関連する学問体系一般、そしてそれらとプロセスワークとの関連についての基礎的な理解が、この試験では求められます。学生は、主要な心理学諸派の中心概念、目的や方法、プロセスワークとの共通性と相違、各学派のよく知られた特長などに通じていなければなりません。

中間試験の構成

各試験には 3 つの段階があり、その後に試験官からフィードバックが与えられます。この構成はすべての試験に共通です。これを下にステップ 1～4 としてまとめ、各段階についての一般的な説明をしました。さらに個別の説明は、続く各試験のところを見てください。

a) ステップ 1：プロセスの構造とメタスキル

この試験には、ドリーミングプロセスの構造的側面——エッジ、シグナル、一次および二次プロセス、チャンネル、メタスキルなど——が含まれます。

どの試験でも、学生のスキルとメタスキル、そしてクライアントの日常的現実とドリーミングプロセスについての基本的な自覚 awareness を確立する能力が試されます。初歩のスキルとしては、クライアントの言葉やシグナルや身体症状、またセラピスト自身のセンシティブな感じやダブルシグナルの中に現れてくる二次的なドリーミングプロセスを日常的アイデンティティ（一次プロセス）から区別できることが含まれます。メタスキルは、本来は測ることができないものではありませんが、試験では個人・カップル・グループ全体に対する尊重／開かれた態度や、個人のプロセスに対する共感や思いやり、未知のものへの興奮、好奇心、初心、自然への信頼、辛抱強さなどが観察されます。この段階では、学生が自分自身の態度や傾向に気づくことができる能力に重点がおかれます。

プロセスの構造を明らかにし、基本的スキルおよびメタスキルを使う能力を測るために、内的および外的自覚 awareness を統合する次のようなエクササイズを使うこともあります。

どの試験領域にも応用できるエクササイズ：

試験官がクライアントを演じ、学生が；

- a. ドリーミングプロセスの言語的および非言語的表れを書きとめる。
- b. 自分自身をスキャンし、自分の感情やダブルシグナルや反応などに気がつく。
- c. 内的な経験を展開する。
- d. 自分の内的な経験をクライアントのドリーミングの経験と結びつけてみる。

b) ステップ2：展開

どの試験でも、感覚に根ざした情報を使ってワークすること、非占有チャンネルを見つけ働きかけること、占有された経験と占有されていない経験を区別すること、ドリーミングプロセスを展開する初歩的能力を見せること等に関わるスキルやメタスキルが試されます。

試験官はステップ1で演じたクライアントを演じ続け、学生はステップ1で集めた仮説と情報を使って、展開を始めます。（ワーク全体を終わらせることは求められません）

c) ステップ3：背景となる理論と比較としての知識

どの試験でも、プロセスワーク理論、その支柱となる哲学、他の諸体系についての認識、それらとプロセスワークとの関連について、広い視点からの理解が試されます。ステップ1, 2で実践能力が試された後に、試験官が質問し学生が答える口頭試問の形で行われることとなります。

d) ステップ4：フィードバック

どの試験もフィードバックと評価によって終了します。これは、その後に学生およびスタディコミティが次の学習段階のための学習契約を作成するために行うフィードバックセッションにおいて大切なものとなります。試験官は、学生のスタイルや自分についての自覚 awareness や個人的成長を尊重しつつ、学生のスキル、メタスキル、理論的理解における長所および成長すべき点を伝えることに責任を負います。

試験1. プロセスワークの理論と実践

この試験で重視されるのは、チャンネル全体にわたる自覚 awareness です。特に、他の試験領域に明確には入っていない視覚と聴覚チャンネルに重きをおきます。

a) プロセスの構造とメタスキル（ワークの基礎として夢を使います）：

試験官が夢を語るクライアントを演じて見せます。学生はその言語、シグナル、内적および外的経験やできごとに気づき、ドリーミングプロセスの基本的構造を提示します。ここで養われるべきメタスキルには、その人全体への感情のこもったアプローチ、未知のものへの開かれた態度、辛抱強さ、好奇心、初心、自然への愛などがあります。

b) 展開：

探っていくべき仮説を見つけたら、学生は二次的に見えるシグナルや経験の展開を始める方法を提示します。ドリーミングプロセスの展開では、特にチャンネルや自覚 awareness が重視されます。夢とワークするいくつかの異なった方法についても、ここで話し合うことがあります。

c) 理論の比較：

学生は試験官と以下のような質問について話し合うための準備をしておきます。ドリーミングプロセスに従うとはどういうことか？プロセスワークの理論的概念——ドリーミングプロセス、ドリームボディ、フィールド、否認されたもの、背景にある経験など——とは何か？そして個人とワークする際にそれをどのように使うのか？合意的現実のことはやアイデンティティの視点とドリーミングプロセスとをどのように見分けるか？ある人のプロセスにおいて夢はどのように理解されるか？そして夢はシグナルや身体的経験とどんな関係があるか？ドリーミングプロセスから夢自体を区別するのはなぜか、そしてどのように区別するのか？

学生に求められるのは、個人のワークに関わるプロセス理論、構造および力動（エッジ、シグナル、ドリーミングアップ）について明確に語れること、またプロセスワークおよび他の心理療法の学派や哲学やその他の伝統的体系の観点から個人の経験について検討できることです。また、次のようなトピックについて語れる能力もここに含まれます：心理学、近代の心理療法、ユング、道教、仏教、先住民族の考え方およびシャーマニズム、夢のワーク、物理学、コミュニケーション理論、システム理論など、プロセスワーク理論に先立つ諸学にみられるパターン、手段、洞察について。そしてこれらの概念や手段がプロセスワーク理論をいかに豊かにし役立っているか。

試験2. ボディワーク

a) プロセスの構造とメタスキル：

試験官が身体的な体験や身体症状を呈示します。学生は言語や身体のシグナル、内的および外的な体験からドリーミングプロセスを探していきます。学生がクライアントである試験官に対して、またその症状や未知なるものに対して、どのようにアプローチするかというメタスキルにも注意が払われます。

b) 展開：

試験官との質疑応答の中で、学生はどのように感覚に基づいた情報を得るかを説明します。また、手で実際に触れる技法、医学的要因や因果関係への配慮、触れることについてのメタスキルや倫理、身体感覚への気づき、一次プロセスの視点から語られる説明から二次プロセスの要素を区別すること、クライアントの説明に従いながらワークの素材にアクセスするための基本、身体的シグナルと症状についての説明に従って技法を使うこともここに含まれます。

c) 理論の比較：

学生はボディワークに関する基本的なプロセスワークの理論を理解していることが期待されます。その中には、ドリームボディの理論、慢性・急性症状、人生の神話と症状の関係、発病時の体験、身体的虐待や外傷などの理解が含まれます。また、プロセスワークの身体症状の

理解に影響を与えた主な考え方、ドリームボディの概念に寄与した医学的パラダイムや身体に関するパラダイムの技法と考え方、プロセスワークと類似する他のボディワークにみられるパターン、他のボディワークがプロセスワークとどう違うかについても、学生は理解している必要があります。

理論の比較に際しては、西洋医学、自然療法、ホメオパシー、アーユルヴェーダ、漢方の医学体系の基本的な特徴に通じていることが求められます。また、次のような身体症状とワークする前にセラピストとしてたずねておくべき情報も理解していなければなりません：頭痛、頭がもうろうとすること・めまい、記憶喪失・意識混濁、麻痺・しびれ、腰痛、胸痛、腫れ物・しこり、視覚の障害、虚弱など。また癌、うつ病、拒食症、過食症、てんかん、喘息といったよくみられる症状の経過や、治療法についても理解している必要があります。

この試験では、ドリームボディの概念、症状や身体的体験とプロセスの関係を含むボディワークの基本的理論を取り上げます。よく出る質問としては、次のようなものがあります：プロセスワークは個人の身体的体験にどのようにアプローチするか？プロセスワークが症状を理解するのにつかう方法にはどのようなものがあるか：例えば、症状とエッジ、慢性症状と急性症状、症状と人生の神話、身体的体験の様々なレベル（犠牲者としての身体、ドリームボディ《夢身体》、神話的身体）など。

また、次のような質問に答えられるように、さまざまな理論に通じ、比較できることが求められます：プロセスワークの症状の理解に影響を与えたのはどのような考えか？他の医学的パラダイムや身体に関するパラダイムの中で、どのような考えや技法、哲学がドリームボディの概念に寄与したか？プロセスワークと類似の考え方を持つ学派にはどのようなものがあるか？それらの考えとプロセスワークの考えの違いはどこか？

実際に手で触れる技法については、この段階で求められるのは、医学的な背景を理解し、また確認できること、身体に触れることについての気づき、感覚に基づく情報に従う基本、症状の一次的な描写（犠牲者としての身体による描写）から二次的側面（ドリームボディの体験）を区別する能力、クライアントの描写とチャンネルに従いながらワークで深めていく素材にアクセスする能力、症状の身体的シグナルと描写に従って技法を使う能力などです。

試験3. 関係性

a) プロセスの構造とメタスキル：

バイシツアー（陪席する学生）と試験官があるカップルの短いやりとりを演じたり、試験官があるカップルの状況を描写したりします。学生は、言語的、非言語的シグナルから関係性の構造について検討することが求められます。その際には、関係性のレベルや、自分自身の反応や、自分がカップルのどちらかに味方しがちになる傾向（サイディング siding）などに気づく必要があります。養うべきメタスキルとしては、関係性に全体としてかわり、その文化に

たいして開かれた態度で尊重する能力があげられます。

b) 展開：

関係性の構造についての討議のあと、学生と試験官は、関係性のレベルに従ってどのような介入ができるか、どのようにプロセスを展開し始めるかについて話し合います。個人、システム、またダブルエッジ現象について説明したり、サイディングがカップルのダブルエッジとどのように関係するかについて考察したりすることも、求められることがあります。

c) 理論の比較：

学生に期待されるのは、関係性におけるドリーミングプロセス、関係性に対するプロセスワークの目標や考え方、ダブルシグナルやエッジ、非難、第三者を含むダブルエッジの力動とそれらにどう取り組むかについての基本的理解について、口頭で話し合えることです。そこには、カップルが自分たちの体験とアイデンティティについてどう描写するか、カップルが否認しているのは何か、どのシグナルにそうした体験が見出されるか、気分（ムード）に気づくこと、ハイドリームとロードリーム、シグナルとダブルエッジに見られるランク、どのような介入が使えるかについての基本的な考えなどが含まれます。

さらに、霊的戦士 spiritual warrior のパラダイム、関係性のタオに従うこと、非難や葛藤、投影、システムの中で「患者」とされる人物 identified patient についてのプロセス指向の考え方、カップルや家族療法の中でプロセスワークに影響を与えたその他のパラダイムや、スピリチュアルな伝統や先住民の伝統などについても、考察するように求められることがあります。

この試験で取り上げるトピックを質問の形でまとめると、次のようになります：関係性におけるドリーミングプロセスとは何か？関係性においてプロセスワークの目標や考え方とは何か？関係性における霊的戦士やタオのパラダイムとは何か？そしてそれは私たちが関係性における因果関係や非難、葛藤、投影を理解する際にどのように現れてくるか？カップルや家族療法に関する他の学派は関係性をどのように理解しているか？プロセスワークの関係性のワークに影響を与えた他の学派の概念やパターン、技法は何か？関係性やかかわりに関するスピリチュアルもしくは先住民の伝統のうち、プロセスワークに影響を与えたのはどのようなものか？

また、個人のプロセスとカップルのプロセス、場と雰囲気役割、カップルのドリーミングプロセスがたどるいくつかのレベル—個人、コミュニケーション（ダブルエッジ現象）、短期（私たち）と長期（神話的）側面、気分、ランクなどについて説明できる必要があります。

実践能力として学生に求められるのは、カップルが自分たちの体験の描写をする際にそれに従いつつも、どのような体験が否認されているか、そしてそれがどのようなシグナルに現れるかを突き止め、理解することです。またダブルシグナルやエッジ、ダブルエッジ、ハイドリームとロードリーム、ランクのシグナルに気づき、非難と第三者を使うことの意味を理解し、こうした現象にどう取り組むかについての初歩的な理解が必要です。

試験4. 変性／極限意識状態

a) プロセスの構造とメタスキル：

試験官は、変性意識状態や極限意識状態にいる人の例を描写するか、自身で演じます。学生は、その人のメタコミュニケーションのできる程度を言語的情報や非言語的情報から判断します。また、二つの状態（日常的現実と、極限意識状態もしくはドリーミングプロセス）を見分けること、自分自身や自分のシグナル、内的な反応とプロセスの構造のつながりを査定することが求められます。養うべきメタスキルには、変性意識状態や極限意識状態にオープンで、文化の持つ偏見に気づいていることがあります。

b) 展開：

メタコミュニケーションのできる程度やクライアントの極限意識状態との関係に応じて、可能な介入について話し合うことが求められます。

c) 理論の比較：

学生は、生物医学モデル、精神医学、DSM-IV、精神性出現（スピリチュアル・エマージェンス）のパラダイム、シャーマニズムといった伝統的理論やその代替として現れてきた理論について論ずるよう求められます。議論のポイントになる可能性があるのは次のような質問です：伝統的な精神医学や生物医学モデルはどのように変性意識に取り組み、扱っているか？それはプロセスワークをどのように補うか？生物物理学モデルや精神医学的診断の有用性と限界はどのようなものか？極限意識状態に対する先住民の／非西洋的な考えはどのようなものか？こうした考えは、我々の意識状態の理解にどのように寄与するか？

シティシャドウの概念、二つの意識状態に関わる倫理、依存と薬物乱用（アディクション）に関するプロセスワーク的考え方などのプロセスワーク理論もここで取り上げられます。メタコミュニケーターが弱くなっていたり不在であるような極限意識状態や変性意識状態にいる個人とのワークについては、以下のような質問が考えられます：このような意識状態にプロセスワークはどのように取り組むのか？極限意識状態に関わるシグナルや体験、プロセスワークの概念（プロセスの構造と反転、非占有チャンネル、メタコミュニケーターの役割）とはどのようなものか？

ここには、半睡状態、気分（ムード）、極限意識状態、依存といった様々なタイプの変性意識状態や極限意識状態の体験について、完結を促し助ける方法を知っていることも含まれます。ただし、中間試験の段階では、こうした意識状態のプロセスに実際には従えなくてもかまいません。

また、精神医学の政治学や、社会においてあるグループに所属する人々が周縁化されることについても理解していることが求められます。

試験5. プロセス指向ムーブメントと非言語コミュニケーション

a) プロセスの構造とメタスキル：

試験官がムーブメントと非言語コミュニケーションの例を演じます。学生は、動き自体に気づき、またそれがアイデンティティについての言明とどう関係しているか、完結していない動きや非言語的体験がどのように現れるか、接触や動きに対する気恥ずかしさなど学生の内的な体験に気づくことなどが求められます。養うべきメタスキルには、非言語的な状態への繊細さ、非占有チャンネルにおける非直線的で未知なる体験をサポートできること、自然への愛などがあります。

b) 展開：

学生は次のようなことを話し合い、試してみるように促されます：様々なタイプの完結していない動きや非言語的プロセスへの介入（昏睡状態や引きこもり状態に見られるプロセスを含みます）、ディープボディワークの介入、動きやその他の非言語的コミュニケーションを増幅する方法など。

c) 理論の比較：

学生は以下の質問に答えられるように準備をしておく必要があります：非言語的にワークすることの重要性は何か？身体的な体験に従う際に、動きを使いながら非言語的にワークする理由は何か？またそれに関する哲学や概念にはどんなものがあるか？心理療法家や動きを扱うファシリテーターにとって、心身両面への働きかけから示唆されることは何か？他の文化、他の治療的伝統、ボディワーク体系、ダンスセラピーの視点からは、非言語的表現、動き、動きのパターン、身体感覚を感じている状態はどのように理解されるか？

試験の対象となるのは動きのワークの基本です。つまり、言語シグナル及び身体シグナルにおける占有された動きと非占有の動きが区別できるか、非占有の動きの性質を知っているか、非占有の動きを展開する基本的能力があるか、動きを展開する際にその非占有の側面とエッジを探ることができるか、などです。

動きとのワークを実践する際の基本には、言語シグナルと非言語シグナル両方から（一次プロセスに）占有されている動きと占有されていない動きを見分けられることが含まれます。学生は非占有の動きの質を見分けることができ、占有されていない動きを展開する基本的な能力を示すことができなければなりません。そして動きを展開する際に、動きの占有されていない側面や動きのエッジに対しても注意を怠らない必要があります。中間試験のレベルでは、学生は様々な動きへの介入方法を知っており、動きのプロセスに応じてそれに合った介入を見つけるにはどうすればいいかを知っていることが期待されます。また非言語的状态とのワークについての基本的な理解がなければなりません。そこには、呼吸を合わせること、ごく小さな手がかりから言語を使うことなくその人の体験を進めていくことが含まれます。

試験6. インナーワーク

a) プロセスの構造とメタスキル：

学生は試験官とバイシッターの前で自分自身のワークを声に出して行うことが求められます。インナーワークといってもプロセスにファシリテーターとしてしたがっていくことには変わりがありません。どのように構造を見立て、介入を行い、どんなフィードバックや気づきが生まれるかを含めて、自分の自覚の中起こることをいわば実況中継していくこと、つまりメタコミュニケーションする能力が求められます。この試験で学生は、初歩的なインナーワークのスキルとメタスキルを使って、自身の夢や身体症状、関係性の問題についてワークする能力があることを示します。特に、未知なるものに気づきワークすること、内なる人物像に気づくこと、内なる批判者に気づくことが期待されます。養うべきメタスキルには、自分自身のプロセスに対する好奇心や、知覚範囲の周縁にある体験へのオープンさなどがあります。

b) 展開：

学生に期待されるのは、占有されていないチャンネルの体験に気づき、従い、展開すること、エッジに気づくこと、エッジで何が起きるかを発見すること、何が起きているかをメタコミュニケーションすることです。

c) 理論の比較：

学生は、クライアントやグループとワークしているときにインナーワークをどのように使っていくかについて話し合うことが求められることがあります。また、ヨガ、ヴィパサナ、タオイズム、錬金術、禅、ユング派の能動的想像法（アクティブイマジネーション）、キリスト教の瞑想の修行や東洋の武道など伝統的な瞑想についての基本的な知識も求められます。こうした伝統の目的と基本的方法、そしてプロセスワークとの関連性についての知識も必要です。

この試験では、自分自身についてプロセス指向のやり方でワークをするための基本的な知識が試されます。学生が試験官の前で自分自身のプロセスについてワークをする際には、以下のようなトピックが試験官の評価の指標となります：未知なる体験を取り上げ、それに従い、また増幅することができるか？どのチャンネルでワークしているかに気づいており、どのチャンネルに未知なる体験が現れやすいか知っているか？学生はエッジに来たことに気づき、エッジにとどまってワークし、エッジを越えないよう引き止めているものが何かを発見できるか？学生は自分のプロセスへの好奇心や、内的生活の神秘への愛を示したか？自分の中で何が起きているかメタコミュニケーションできるか？

試験7. グループワーク

a) プロセスの構造とメタスキル：

この試験は、決まったファシリテーターを持たない学びの機会という形式を取ります。そのため学生は、グループをファシリテートする能力ではなく、気づきを持ってグループに参加する能力が試されます。参加の仕方にも、静かであったり、たくさん発言したり、知的に理解したりという様々なスタイルがあります。こうしたスタイルに優劣はなく、そのときそのときの

流れでどれもかけがえのないものです。実際にグループプロセスを行い、また構造および理論についての討議を行います。その中で試験官は次のようなものに気づく学生の能力を確認します：役割、ランク、ゴースト、雰囲気、またグループや自分自身の中にある「主流派」に属して他を排除しようとする傾向など。またメタスキルとしては、チームワークの能力、ある役割に対する自分自身の反応や感情や執着に気づくことができる能力、エルダーシップや全体への興味などを確認します。

b) 展開：

試験官は学生が以下についての初歩的な能力があることを見ていきます：役割を取ったり取り替えたりすること、役割に入ったり出たりすること、自分がどの役割におり、その役割にどのようなランクがあるかに気づき、よく考えること、エッジにおいてその両サイドをサポートすることなどです。

c) 理論の比較：

この試験で学生に期待されるのは、タイムスピリット、役割理論、深層民主主義、ランクと特権、グループワークにおけるインナーワークの重要性などの基本を知っていることです。学生はまた、新しい物理学（量子力学）やタオイズム、ユング派や神話的な考え方がワールドワークに与えた影響や、他のグループ理論や葛藤解決の考え方とプロセスワークの考え方の比較について討議できる必要があります。

試験はクラス形式で行われます。一人の学生に対して試験官が二人という形ではなく、複数の学生（そのときに中間試験を受けている学生全員）に対して試験官が二人という形式で、2～3時間行うものです。グループに参加する学生は、みな参加者であると同時にファシリテーターであって、ファシリテーションに責任を持ちます。学生にとっては、グループワークの理論的、実践的知識について確認し、グループという設定の中でエッジに来たときにインナーワークを使う能力を示す機会となります。

学生の実践能力として期待されるのは、役割やタイムスピリットという考えに沿ってグループの問題を理解すること、一つの役割として自分が前に出ることができること、ホットスポットやエッジに気づき、またそれへの興味を示すこと、グループプロセスにおける自分自身と他者のランクへの基本的な気づきを示すこと、グループにおいてどのようなコミュニケーションスタイルや体験が主流になり、また周縁化されるかについて最低限の気づきがあることなどです。また、自分自身についてグループの中でワークすることが初歩的ながらできること、そのために役割を持ち込んだり、ホットスポットやエッジに気づいたり、自分のダブルシグナルに気づいて自分の体験を持ち込んだりできることも期待されます。

この試験の後に、受験者、バイシツアー、試験官全員が参加する「試験ミーティング」が行われます。

プロセスワークディプロマプログラム
コースハンドブック
コホート制
2011 年度4月版

編集・発行：日本プロセスワークセンター事務局

〒156-0041

東京都世田谷区大原 1-3-11

Email: info@jpsc.jp

電話/FAX：03-3485-4208

Website: <http://www.jpsc.jp>

発行日：2011 年 3 月 10 日